時右の修行者は立つて笈の中より名刺を取り出し、聖人に奉つり此時初めて自身の名を名乗られ、聖人の御弟子へ加へられんこと乞ふたと云ふことである。是れが即ち鎮西派の開祖たるべき、聖光坊辨阿が聖人へ御對面の御話である。何故聖人は聖光坊を睨みなされたかと云ふに。一體聖光坊は聖人の御弟子にならふと初めから心掛けて來たのではない。此人は舊鎮西にありて、早や念佛のことを調べ其處で一流を樹てんと云ふ心組があつた。處へ京にての法然聖人の噂が高く、遠く此邊迄も聞へましたから、其處で聖光坊は法然聖人と議論を戰はし、あはよくば法然を自分の弟子にせん、若己れよりも法然の學力すぐれたらば、其時法然聖人の門下に就かんと、心を決して上つて來たのである。それを明智の聖人ゆへ、一見するなり御存知あつて、其慢心を挫がん爲め、斯は睨み玉ふたものである。其處で聖人が「唐の念佛か日本の念佛か」と仰せられた時、聖人の學力すぐれたることを知り、自分などの及ぶところでないと知つたから、初めて名乗の名刺を出し、其弟子となつたのであります。之れ道を需むる爲めにあらず、議論の爲めに出て來たものなれば聖人が心安く教を垂れさせ給はぬ筈であらふと思ひます。一心一向に念佛する行人が人と議論を仕た處で、無益であるからであります。

聖光坊は餘程勉强の人であつたと見へる。聖人の門下にあり御法話を聽聞するときは一々之れを筆記仕た。夫れが三年程經る間に、笈に一杯になる程溜まつたと云ふ。「もう此位學問せば不足はない、是れより故郷へ歸へり、一旗擧ん」と或る時聖人の前に出て、是れ迄の恩を謝し、「すこし故郷に用も御座れば何卒御暇賜はれ」と申し上げた。聖人は別に御止めもなさらず、早速御暇下された。其處で聖光坊は旅行の仕度を爲し、吉水の庵室を出づるとき聖人は側の御弟子に向はれ「ア、惜しき法師が髻を切らず、立ち去るわい」と仰せられた。今や鞋を穿き掛けた聖光坊は遙かに此御言葉を耳にはさみ、つか〳〵と又上りて聖人の御前に來り「只今あなたに承たまはれば法師が髻を切らず」と仰せられた樣に承はりしが、私は三年の間師

に事ひ、其以前から圓頂法衣の身でありまするに、夫れを誓を切ぬとは如何なることとか御示し下さいませ」と申しました。其時聖人は善く尋ねた。さらば其譯を言ふて聞かさう。成程お前は相は法師に違ない、けれども尙目に見へぬ誓が三つある。お前は是れ迄て己れの處で聞いたことを書き寫し抄本を笈に入れて持つて歸るが、夫れは何の爲かと云ふに、第一之れを持つて、諸方で講義を爲し其名を擧げんと云ふ心があるてあらふ。是れが誓の一つである。又多くの人の歸依を受け、其施物に依つて其身を養はんとするのてあらふ、是れを利養と申して第二の誓である。又他の僧俗と力量を較べ、彼等に打ち勝ちて之れを我弟子となし、一流を樹んとの心組てあらふ、是れ勝他と云ふもので第三の誓である。三年の間わが處にありて、肝心な出離の大事に心を止めず、夫れ丈けの力を具ひながら、道心を得ずして立ち去るは、是れ「あたら法師が心の誓を切らずして去るものではないか」と御敎訓なされた相てあります。其處で聖光坊は大きに耻ぢ笈の中より右の抄本を取り出して、之れに火を注ぎ、殘らず燒いて仕舞ひ、其處て心から發心したる證據を御目に掛け、後故郷に歸つたと云ふ。けれども後に鎭西派の元祖となり、其一流は聖人の法義、念佛の極意を得て居らず、二十願の機に滯り、他力の第十八願の正意に契はぬとの事てあります。之れ心內に名聞利養の下地あり、議論勝他の爲めにしたから、折角の妙法も心に徹底仕なかつたと曰はねばなりません。

## 親鸞聖人求法の態度

實の求法と云ふは、誠心誠意でなくてはならぬ。勿論議論や勝他の心あるべきものでない。差當り「如何にせば必墮無間の危きことを免るゝことが出來るかの、死活問題にぶつかつて居るのてある、吾々は親鸞聖人を手本として其態度を學ぶべきてある。聖人は比叡山にあり、二十餘年の功成り、門跡の地位に至られたのてある。然るに白の衣を脫ぎ、其名譽ある地位を棄てられ、墨の衣に墨の袈裟、一心不亂になつて吉水の禪房を御尋ねなされたは、まこと出離の要法を誠心誠意に求めに御出

てになつたのである。故に御師匠法然聖人は隔意なく宗の根底から其信念の有の儘を、さし示しなされたもので、聖人も亦此御心得で入らせられたから、其場を去らず、教の至極を誤なく御相傳なされたものでありましやう。此處を「太師聖人宗の淵源を盡し教の理致を極めて之をさづけたまふところに、忽他力攝生の旨趣を受得し、飽まで凡夫直入の眞心を決定しましけり」と御傳鈔に書き遊ばされたのであります。

## 二類の用心

用心に汎爾の用心と眞劍の用心と二類があり、漠然と考ふるが汎爾の用心、實際の場合を思想の上に何度も何度も持ち來り、其手當進退を講ずるを眞劍の用心と云ふのであります。例へば劍術の如きものである。劍法は切り合ひのある時の用心に稽古するものであるが、併し劍術ぢやと思ふて唯其術を研究するならば、夫れは眞劍の稽古と云ふものでない。夫れは卽ち汎爾の用心を以つて稽古する劍術と云ふものである。劍術の試合に能く見るところであるが、「お面」と打ち込んで置いて後へ向き返る劍客がある。是れは何流と云ふもので、どう云ふ積りでするのか門外の吾々には判からぬことであれど、實際の切り合にあんな呑氣なことが出來るものであらふか。確かに敵を切り割たと思ふても、若し夫れが實際の場合なら、グルリと後向になるゝものではあるまい。確かに切つたと思ふても若しや夫れとも急所を外づし敵は痛みを踏み耐へて切り返しはせぬかと、刀を持つた儘身構をするが、實際であらふと思ふ、夫れに、悠長にも後向になると云ふことは、あれが唯の劍術業の巧拙を稽古する、曰はゞ嘘の切り合を仕て居るのだから、出來るのではあるまいかと思ひます。世語には疊の上の劍術畑の水錬と云ふことがありますが、今の劍術もそんなものではあるまいかと思ひます。成程少しも稽古を仕ないものよりは、益であらふ、けれども毎日こんな積りて稽古を仕て居つたのでは、實戰に臨み實際

敵に向ふた時に、平生の技もどこへやら、引込んで仕舞ひ、體は棒の樣にしやちこばり、一向手も足も出ないことになるのではあるまかと、思ひます、仕て見ると汎爾の用心と云ふものは、用心仕ないものより幾分増かも知らぬが、十中八九は先づ役に立たぬものであらふと思ひます。後生のことも其通り死なぬ積に居つて死ぬ用心する、之れ汎爾の用心でありましやう。そんな積りで聞いたり、研究したり仕たのでは、その時よく判かりよく、安心が出來て居つても、今度いよ〳〵命がないと云ふ時に又不審が起りはせぬかと思ふのである。

## 教へた子に教へられた爺さん

私の近傍に六十五程の爺さんがありました、此程老病で遂に亡くなりましたが、極て法義に渥き心掛のよい爺さんでありました、其孫が或時大病にかゝり醫者はも一默目であらふと見放した時、右の爺さん泪ながらに孫の枕もとにすはり、拳を振はせながら孫に向ひて、阿彌陀樣は、如何なものも助けて下さるのだから、本統に間違ないと思ふてお念佛を申せ、必ず救ふて下さるぞよ、よいか、わかつたか」と言ひ聞かせた相です、孫は之れを聞いてうなづいたのを見て、「これで死んでも屹度お淨土へ生るゝからと、爺さんも喜んで居りましたが、孫の命は不思議にも助かり追い〳〵病氣も輕くなり、終に全快致しました、然るに是れより凡一年も過ぎて、今度は右の爺さん死病に取り付かれ、愈〳〵此土の暇乞であらふと思つた時。急に今迄のことが判らなくなり、日頃の信仰も崩れ「どう仕たらよからふ、死んで往く先が判らなくなつたから、誰か賴んで來て聞かせて呉れと悶出しました。其時前の孫が「お爺さん、お前何曰はつしやる、此前己れが寢て居る時、お前教て呉れられた通でないかい、阿彌陀樣が此儘救ふて下さると云ふのてないかい、それを本統にして念佛申せば間違ないと曰はしやつたてはないかい、お前夫れを今忘れたのかい」と曰ふと「其阿彌陀樣がどうして此儘己れの樣な罪深いものを助けて下さるのか、夫れが判らない」と云ひ出した相ですが、皆さん此お話を聞いて如何なる感覺を起

しますか、爺さんが孫に教へた了解は、言葉の上に少しも間違つて居らない筈です、其通平生安心し落付いて居つたにも拘はらず、今になつて崩れるのは、矢張疊の上の劍術であつたからですぞ、唯の劍術で、覺へた技の樣なものであつたからですぞ、夫れ故嫌な程知つて居る平生の了解が、眞劍死ぬる場合に役に立たなくなつたのであります。形には稽古の時も眞劍のときも別にかはりはないが、唯心に變りがある。稽古の時に遺つて居る手を其儘眞劍の時に應用せば、夫れでよいのである。然るに平生稽古して居る手が其場になりて出て來ないのは一體平生の用心が足らぬからである。平生稽古の時、眞劍の覺悟で居れば、平生の手が眞劍のときにも出るであらふ。安心立命も其通り平生の了解と死ぬる時と、了解が別にあるものでない、夫れに平生云ふて居ることが、死ぬる間際に崩れると云ふのは智解に不足はない、用心が違つて居つたからである。死なぬ積で死ぬ用心を仕て置たからである、詰まり眞劍になつて聞いて居らなかつたのである。教の言葉に不足はないが、唯覺悟に、至らぬところがあつたからであります。仕て見ると唯口でばかり述べて見た了解ではいかぬ、いつも今が臨終聞き仕舞の覺悟になつて聞かねばならぬ。それでいつ取り出して見ても往生一定御助治定の謂が、本統に賴みになられるなら、夫れこそ金剛不壞の信心と云ふものである。金剛とは火に入つても熔けず、水に入りても壞れざるが金剛である。悲しい時も、喜ばしい時も、刹ない時も、死ぬるときも動かず、壞れず、亂れず、狂はず、崩れざるが金剛堅固の信心と云ふものである。汎爾の用心でばかり聽て居つたのでは金剛の信は得られぬてあらふ。故に蓮師は「たび〳〵人にたづぬべし、一應の聽聞にては誤りある」と仰せられた樣に覺へて居ります。眞宗に於ては臨終正念にあらず平生業成であるから、臨終に間違つたことを思つたから、夫れでひつくり返へると云ふのではないけれども、併し其時ひつくり返へる樣な安心で見ると先づ平生の安心が至つて居らなかつたと曰はねばならぬ（精神錯亂して彼是云ふのは此限にあらず）、要は平生の用心如何にありと曰はなければなら

ぬ。平生の用心とは、汎爾にあらずして。いつも眞劍の積でなければならぬのであります。

## 信仰の生涯

世は年を追ふて複雜となり、生活の狀態も隨つて困難に趣く傾向がある。されば憂いこと強いことが次第に多くなつて來たるは明かなことである。之れに向つて耐え忍ぶべき抵抗力を養はねばならぬ。併、或るものに向つて絶えず抵抗する時は絶えず其力を失はねばならぬ之れを失はぬ樣にするには此處に其苦を減じ、其心を慰むるものがなくてはならぬ。心に彈力性を附するには、心に慰安を與へねばなりませぬ。

慰安は何に依つて求むべきや

心に慰安を與ふるに、演藝遊戯の如き娯樂を以てすることがある。是れは外界から物質的に求むる慰安にして、之れも必要なる道具であらふ。我國に於ては此種の慰安が未だ乏しいと曰はねばならぬ。遊戯娯樂の設もないではないが、或るものは却つて不健康を來し、或るものは一般の社會に行なはれて居らぬ。特に運動的遊戯は小兒のすべきことゝし、大人は之れを小供臭しとして顧みない弊がある。是れ宜しく一考すべきことがらであらふと思ひます。併、外界より求むる慰安は大概一時的のものにして、此多忙の世の中に悠々娯樂のみを事として居ることは出來ぬ。假令其暇ありとするも之れに依つて得たる慰安は一時の氣紛に過ぎませぬ。且つ其慰安も常住にあらず、少しく進まば前の樂きものも、今は樂しからざることになるものである。

眞の慰安を與ふるは信念である。未來の成佛拔苦與樂の佛恩を憶ひ慶喜渴仰の思に住せば、身は攝取の信光に包まれ、心は至妙の淨土に往來す、假令貧苦の中に立つとも猶水府の光國公が國に無限の富を控へ、三位中納言の名望を胸に秘め、姿た

は賤しき百姓となり、光右衛門と稱して諸國を遊歷するが如きものでありましう。此樂みたる他の娯樂遊戯の樣に、遊ぶに手間日間入るものにあらず。樂まんとすれば、仕事を休めず。仕掛をせず、相手を撰ばず、時と處を論せず。唯思ひ出す迄てにて、心に大なる慰安を與ふるものである。單に慰安を與ふるのみならず、其身の辛苦を實際に忘れしむることが出來る、一時的にあらずして、死ぬる時迄其樂み變せざるのである。死ぬる時迄變せざるのみならず。未來永々劫變せざるものである。

人は「張合」と云ふものがなければ何事も出來ないものである。之れを名けて企望と云ふ、企望なき人あらば夫れは精神的に於て全く死したる人である。企望なき人は獨立することは出來ぬ、人鞭を揚げて之れを使ふて呉れざれば、何に事も出來ぬものである。故に企望なき人は假令生きて居つても、夫れは人間として生きて居るのではない、夫れは牛馬として生きて居ると云ふて差支なからふと思ひます。

企望なき人は實に情ないものではありませぬか。處で現在に企望ありとも其人が未來に何の企望がないならば、其人は半分しか生きて居らぬ人であります。何となれば、現在丈の企望ならば、其企望が達せられたる時、早や其人は死なねばならぬからであります。之れに反して未來成佛攝化利生に望を屬するものは永々劫死と云ふことはないのである。永劫不變に一貫せる企望を持つものは、何處に居るも常住である、常住の身なれば、あはてることもない前を樂み〳〵落ち付き拂ふて、物事に從事することが出來ます。往く先きに企望と光明あれば、現在の苦痛も忘れます。

## 曹操の奇警

魏の曹操は智畧に富んだる人でありました。或る時、大軍を率ひ、長き途を進みました。時は至つて暑き頃にて、家に居つても猶、困しむ折なるに、長々の行軍にかて〻加へて食に乏しく、其上に一同が渇して來たが、折惡しく何處にも飲むべき水がない、其處で一同は大きに弱り、最早一足も進めぬ樣になりました。其時大將

たる曹操は一同に向ひ、「汝等よく聞け、是より二十里前に大きな梅の林がある。今頃は尤もよく熟して居る、早やく其處まで往きて其梅を食ふことにせよ」と申した一同の者は之れを聞いて喜んだ、「何んても早く其處へ往かうと」口の中に酢を生じたる思で、我を忘れて一散に走り、一足も往けないものが一氣に二十里も馳けたと云ふ話がある。

## 至妙の樂

信佛の因緣に依り、お淨土に生ずれば、功德のお蔭に依り、穢惡汚染の心が無貪淸淨なる、彌陀の淨心に薰ぜられ、麻に連る蓬の如く、曲れる心も直になり。見るもの聞くもの皆歡喜の種ならざるはなく、菩提證道の緣ならざるなしとある。故に阿彌陀經には「其國の衆生、諸〳〵の苦あることなし、但もろ〳〵の樂を受く、故に名けて極樂と云ふとあります。是等の樂を、今から想像せば、此世の憂苦は忘れらるゝてはないか、超世の悲願きゝしより、吾等は生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみあそぶ」と親鸞聖人の御述懷にもあります。有漏の穢身とは迷の此身と云ふことである。三界を當もなく流浪する百姓の光右衛門見た樣なものである。或る時は暴漢の打擲を受け、或る時は宿める旅館のないこともある。丁度吾々が貧苦に攻められ、思ひも寄らぬ災難に、出逢ふと同じ事である是れ迷妄の爲めに三界を流轉すると同じことである。實に三界無祿の浪人ならば、實に刹ないことであらふ。併し世には澤山な無宗敎者、行き處ばったりの現世主義物質主義の人がある。是れ實に三界無祿の浪人見た樣なものである。吾々は幸にして、浪人の足を洗ひ、福得圓滿の光明界に入れて貰つたのである。何んたる仕合な者であらふ。何故かと云へば、心は淨土にすみ遊ぶからであります、如來と氣脈を通じて居るからであります。「超世の悲願」とは彌陀の大願のこと、卽ち「我れを恃まんものは必ず救ふべし、たとへば罪の深きこと闡提の如くとも」とあるのです。かゝる擴大な御誓願は法界に又と見ることは出來ませぬ。故に之れを超世の悲願と

云ふのであります。此願意を聞いて見れば、彌陀大悲の深きこと、其不思議力とが信ぜずには居られぬ。往生治定、御助一定の思より外はない、仕て見れば、今後は如來の御手に救はれて、生死に住せず、必ず涅槃妙境界に至らせて貰ふ身である、こゝを「超世の悲願ききしより」「われらは生死の凡夫かは」と仰せられたのです。吾等は形は百姓でも心は水戸の御前である、豈愉快ではないか。この心得て生活するを信仰の生涯と申します。信仰の生涯程仕合なものはありませぬ。

## 迷　信（其一物忌）

迷信とは如何なることかと云ふに、道理上有り相にもないもの、又實驗上にもない事何者が云ひ出したか出所の正しからざること、又多少由るところがあるとしても、人間としては耻づべきものなること、是等を凡べて迷信と云ふて差支なからうと思ひます。眞宗に於いては現在祈禱を、凡べて雜行雜修と名づけ宗の掟に背くことゝしてあるが、兎に角現世祈りは迷信の出發點となるから眞宗ならずとも、宜しく排斥すべきものであらうと思ひます。

### 迷信の種類

迷信の種類にも色々ありて、一々枚擧する遑ない位であるが、先づ大別せば、物忌延喜を祝ふこと、働かずして福祿を求むること、日の吉凶を彼れ是れ陳ずること、病氣平癒を祈ること、日月山川の如き自然物を崇拜すること、野獸虫魚を崇むること、等であらふ。要するに右に云へる事は信仰の薄きところより來る一種の病的信仰である、純粹他力の眞信に確かと心を落ち付け。永生の樂果を得させて貰ふことゝ堅固なる安心に住するものゝ爲すべき事ではない。あれやこれに氣迷ふのは良醫を信ぜずと、草根を嚙み、木皮を煎じ牛溲馬渤を藥用とするが如きもので、笑ふべき事柄である。

### 物忌

其中で我國にも昔から何處にもあり勝ちな、物忌や、延喜などを祝ふことがらは

譯のない詰まらぬ戯事である、そんな事が決して當てになるものでない。曰はゞ出所の正しからざるものである、誰が言ひ出したか別らぬ事柄である。道理上實驗上あり得べからざることである。當てにならぬ事を當てにして、肝心な務を忘り。據もない事を氣に掛けて快活な心を沈め腐らす弊害は、皆是れから生じて來るものである。

## 俊寛と鹿ケ谷の會合

僧の俊寛、成經、西光の徒、昔平氏の專横を憤り一味のもの相會して謀反の大事を議した、之れを鹿ケ谷の會議と云ふ、會議畢りて酒宴と爲る。酒數行一人ありて座を起ちながら過つて膳の側にあつた德利を裾に引き掛け、之を倒した。一人が之を見て「やア方々平氏が倒れました」「そりや何んと仰せらる平氏が倒れましたとな、して如何して」「されば御覽ぢろ、これなる德利が倒けましたわい。德利は唐樣で讀めば瓶子と申す、瓶子は平の平氏に國音が通ずるじや、されば平氏が倒れまして御座るわい。」「ヤアこれは奇妙々々如何にも貴殿の仰せの通り、是れ横暴の平氏が此度亡ぶる前兆で御座らふ」如何にも芽出度い事で御座ると」一座こゝにわつと。鬨の聲を擧げ、先づ我が黨の萬歳を祝した。是れが所謂延喜と云ふものであらふ、けれども、此延喜は事實に於て、何の意味もないことが證明された。鹿ケ谷の會議の後間もなく、一味であつた藏人行綱の返り忠に依り、此企が露見して其發頭人たる成親、西光は捕へられ中にも西光は面皮を剝かれ、いとも無慘な虐殺に遭ふた、俊寛僧都は成經、康賴の二人と共に鬼界ケ島に流され、後二人は赦されて本國に歸へりしも、俊寛僧都のみは獨り無人空漠の鬼界ケ島に殘され、食ふものとては海草、衣るものとては藤かづらより何にもなき處に獨り取り殘され、湯に入らざれば、身體は松の古木の如く、髮切らざれば振り亂して地に曳きつ、斯くてなづかしき故郷の空を睨み、いとも憐れな最後でありました。是れは餘の御話なれど平氏が仆れたりと德利を梟首にして延喜を祝ふた人々の果ては、此位のもので御座

いました、如來の恩籠を蒙りながら、仇し諸神と緣を結び賴みを掛け、雜行を修し雜修に心を寄せて、あれや是れやと延喜を祝ふとも、金剛不懷の信心なくば、獨り長夜の闇に閉ぢられ、三界流浪の迷ひ子となり。幾千載の憂き目を見るであらふ。其時に虛空を睨み、多情のこの身を恨むとも、何の所詮もないことでありましやう

## 四十九の餅

又或る人が、然る人より餅を贈られたが、數へて見れば四十九、「アヽ、四十九とはこりや亡者の黃泉を辿どる中有の日ぢや、正月早々延喜の惡るいこと仕て呉れた」と大層氣に掛けて居る。其處へ蜀山人が通り掛かり、其人の氣直しに讀むだ歌が「七つ宛、七福神にくばらめや、七七四十九あらふ賀の餅」と云ふのであつた。其處で、右の人大きに喜び、こんな芽出度いことはないと云ふたとの事である。何んとたわいもない事ではないか、四十九は如何に讀むとも四十九である。夫れを亡者の中陰日ぢやと思へば悲しくなり。七福神に配ばれば芽出度いとは。實に浮氣な心であるまいか。

## 太閤の松

又太閤秀吉公が、秘藏の御庭の松が枯れたと聞き、大層塞いで御座る。御家來の人々が御機嫌を伺ひましても、面を脹らせ、碌な返事をなさらぬ。隨つて脹れ物の樣に當りが惡い。何か云ふとすぐに、荒々しく御叱かり遊ばす、家來共も之れには困まつて居つた。處へ氣輕な曾呂利新左衞門が伺つた。太閤は矢張り閻魔面を仕て御座る。「殿下申上ます」「何んぢや」「御見受申せば今日は御機嫌麗はしく入らせられぬ御樣子、何んぞ御氣に召さぬことでも出來ましたか、但しは御容態でも勝れさせ玉はぬか」「新左、予は殘念の事を仕た、秘藏の庭の松が枯れたとの事ぢや」「へー夫れはお氣の毒な事で、併し生あるものは必ず死し、生えたものなら枯れるも道理、別に不思議は御座らぬ樣に存じますが、夫れが御機嫌に障はるとは如何樣な譯て」「默り居らうぞ新左、松が枯れるに不思議はないとは心なき一言、あの松は予が長

命にあやかつて自らか植へたものぢや、夫れが今時枯れると云ふは如何にも不吉ぢやわい」「ハアー、これは又聰明なる殿下の御言葉とも覺へず、新左之れを以て殿下の萬歳を祝し奉ります。「それはまたどう云ふ譯ぢや」とお尋ねになつた時新左衛門の讀むだ歌と云ふのが、「御秘藏の御庭の松は枯れにけり。千代の齡を君にゆずりて」と云ふのであります。すると、太閤樣の御機嫌が直ぐに直つたと云ふが是れも前と同じ筆法で取るにも足らぬ事である。

是等の事柄を綜合して見れば、凶も吉も、自分の心得、即ち思ひ樣にあることで何も餅の數や、松に關係のあることではありません。延喜など云ふことは、凡べて此種類に屬し、詰まり無意味のものであります。禍福は綯へる繩、塞翁の馬の如く心の爲さぬ、不幸は、前生の業因なりと知らねばならぬ。夫れよりは今後の業因に心を注ぎ、惡るい因を蒔かぬ工面を仕なければならぬ、其處で今後未來の幸福となる。正眞の業因は如何にと申すに「本願の名號は正定業なり、至心信樂の願を因となす。等覺を成り、大涅槃を證することは必至滅度の願成就すればなり」と親鸞聖人は敎へ玉ふた本願の名號卽ち、南無阿彌陀佛が、將來幸福の正因ぢやと云ふこゝろ、これは未來の御話だが、現在に於ける心得としては、右の如く名號の御利益を信じて未來得脫の慶を胸に浮めて、歡喜し、愛樂し、務むべきを務め、爲すべきを爲し、其上は順逆共に佛緣たることを喜ぶべきである。歡笑喜悅は心を强盛ならしめ、陽氣にならしめ艱難に耐へしめ、成業の基たらしむるものである。「笑ふ門に福來る」とは此意を云ふたものぢや。禍を轉じて福とならしめるのも則ち歡喜の賜である。

何事にも善事を見出し禍を轉じて福とせる老婦

アンダーセンの中にこう云ふ御話がある。或る田舍に極貧末にして小屋同樣な一軒の家がある。此家に一對の老夫婦が、至つて。睦しく暮して居つた。特にお婆さんは快活なもので、何事にも悲痴を云ふたることはない。且つ亭主のする事は、どん

な間違でも常に嫌やな顔をせず。善い方に取り之れに同情を寄せて居つた。家は至つて貧しけれども夫れにも拘はらず、此家には和氣靄々たる、春風が年中絶へなかつた。笑ふ門に福の神が來ると云へど、此家ばかりは何故か貧乏神に緣深く、困窮の絶え間がありませんでした。或る日是れ迄でに賣り殘せし、家に取りては大切な財產の一つであつた、一頭の馬迄で、賣らねばならぬ事になりました。其處でお爺さんが「婆さん、今日はいつもの處で市が立つからこれから馬を連れて往つて賣つて來るぜ」婆さんは「さうかい、夫れは御苦勞ですね、成る丈けよき價に賣つて來て下さいと、其處で婆さんは埃だらけの帽子を取り出し、ブラッシの代りに御麁末な手の掌でぐる〳〵撫て回はしながら、之れを爺さんに冠せて遣つた。處が此爺さんは、大の根性善しで、何も知らないものであつたと見え、少し往くと向ふから、一人が牛を曳いて來た、夫れが牝牛であつたので、之れと交易して仕舞ふた。夫れで家に戻れば何事もないが、今度は又羊と交易を仕た、其中に向ふから鵝鳥を一羽



抱へて來る子供がある。夫れを見て爺さんは此鵝鳥が欲しくなり、子供に談判して鵝鳥と交易して仕舞つた、之れを先程から見て居た。狡猾な一人が、爺さんにうまいこと說き付けて、雞一羽と換へて仕舞つた夫れから更に又欺かれて、之れを一袋の腐つた林檎と換へて仕舞ひ、詰まり大切の家の寶であつた一匹の馬が、かはり換つて、腐敗した一袋の林檎と化けて仕舞つたのであるけれども、爺さんは別に損したとも思はず、聊か慰勞の積りて、洋食店に入り込り食堂の眞中に立てるストーブの上に其林檎を置き、テーブルに向ふた。するとストーブが熱くなつて居る處へ、袋の中から林檎の腐れ汁が流れ出て「ジリ〳〵、ジリ〳〵」と變な音を出す。爺さんよりも先客であつた二人の英國人が之を聞き、何んだい「あのジリ〳〵云ふのは」と爺さんに聞いたから、爺さんは腐つた林檎であること、夫れは馬と交易した事と、家に於ける婆さんが林檎を好くことゝを話した、英人の一人は「婆さんがいくら林檎が好きぢやからつて、大切な馬と替へた日にや屹度怒るぜ」と云ふと、爺さん「何

家の婆さんは、優しいもので怒つた事はありや仕ないよ」と云いつゝ爺さんは又其袋を擔ひて其處を出で、家に歸つて來ました、婆さんは入口迄で出迎ひ、「やれ〳〵御苦勞でありたのう、して馬はどうなりましたい」爺さん「夫れは牝牛と交易を仕た」婆さん「やれ〳〵嬉しや、夫ぢや明日からおいしい牛乳が呑めることだわいな。」爺「いや、處が夫れを羊と換へたのぢや」婆さん「さやうか、夫れは一段と結構、妾や牛乳よりも羊の乳が好きぢやわいな」、爺「處が又夫れを鵝鳥と交易たんだ」婆「ほんにそうかい、鵝鳥の卵は大きいつてのう、これからそうすれば毎日お前と卵のフライを仕て食べられるの」爺「そりやさうぢやけれど、夫れを今度は雞と換へたのだ」婆「おやさうかい、いや去年クリスマスには鳥の燒き肉も食べることが出來なかつだが、そうすりやお前のお蔭で今年のクリスマスには、燒肉を食ふことが出來るね」爺「いや婆さんお前がさう云ふて喜ぶのはまだ早い、夫れを今度は一袋の林檎と換へたのだ」婆「おやまーそれは本統かい、それなら、妾や猶更有難いのです。

實はね、お前が出て往きなすつたあとで、歸へられたらお前に進せやうと思ふて、ケーキを燒いたの、夫れから添へ物に何か野菜が欲しいと思つてね、夫れからあの校長さんの家へ菜を一握程貸して下さいと云ふて往つたらね、あのおかみさんが碌でなしで、澤山裏の畑を作つてあるのに「何に貸して呉れつて、裏には何んにも生へて居りませんよー、お氣の毒ですが、日皺た林檎の一つもありません」と、まー、こんなに云ふたんですよ。夫れを今聞けば今度は妾の方から一袋の林檎も貸して遣らるゝぢやないかい、妾や夫れが嬉しくつて」と云ふて居りますと。家の入口の方で何時の間に來て居つたのか前の英國人が二人立つて居て、此問答を聞いて居つたが、此時一人が口を開き、御免なせい、さつきからあなた方の話を此處で聞いて居りました。お婆さんあなたは感心な人ぢや、お爺さんの交易話は、聞けば段々下り坂である。惡くなる一方だ。夫れをお前さんは腹も立てず、愚痴も曰はず、牛と交易いたと云へば牛を褒め、鵝鳥と取り換へたと云へば鵝鳥を喜び、果ては腐つた林檎

ても夫れ相應な使ひ道を見出して樂んで御座るとは、實に感服しました。何を隠さう、實は吾々同士で賭を仕たのである。先き程家の爺さんに洋食屋で出遭ひ、馬と林檎とを交易せられたと云ふから、屹度爺さんが歸つたら、お前さんが怒らるぢやらふと、此一人の男が云ひ、私は爺さんがあー云ふたから怒るまいと云ひ、其處で此男と千圓の賭を仕たの、夫れでどうなることかと、爺さんの後に踵て此處へ來て、聞いて見ると今の有樣、其處で私は千圓利かりましたわい、仕たがお前さん方の陸じいのは實に羨ましい、何はなくとも、一家の和合さへ調へば、百萬の財産よりも尊い。善い手本を見せて貰ひましたから、其御禮に今賭けて取つた千圓は、あなた方へ差上げます」と其處で其お金を頂戴して二人は大きに喜び幾度か禮を云ふたと云ふことである。

實に味のある御話ではありませぬか、嚙めば嚙む程、味のある教訓である、人には運と云ふものがありて、人に依つては奮鬪努力しても益々下り坂に向ひ、不幸一方に傾くものも世には隨分あることであらふと、思ひます。こんな時に精神の薄弱な、信念の脆き者になると、色々と心に迷を生じ、方角や、延喜や、御幣を擔ぎ出す樣になる。夫れも効がないと、神を怨み佛を詈り、人を憎むと云ふ樣になる。然るに今此御話の婆さんを手本とすれば、往くところ結構ならぬはないのである。高等官吏が免職になりて一個人となつた時は如何に、旦那樣から下つて水呑百姓となつた時は如何に、丁度馬を林檎と替へた樣なものである。けれども官吏は官吏として取るべき處あり、一個人は一個人として又樂む處がある、旦那樣は旦那樣でよい處があるが、水呑百姓は又百姓として棄て難い氣樂な處がある。要は隨所に其境遇と運とに應じて夫れ相應のよい處を見出すべきことである。さすれば常に笑つて居られるてはないか。閻魔顏をすべき必要は何もないのである。延喜を云ふよりは、心を樂しくすべきことである。現世を禱るよりは、現世に祈られ。現世に人に羨まるゝ樣にせねばならぬ。人をばかり羨む者は人に羨まれる者でない。人に羨まれん

とするには、自分が人を羨むべき何物をも特たざる事程、何か一つ心に滿足するところがなくてはならぬ。夫れは何んですか、曰はく未來に向つては他力金剛の信、現在に於ては之れに望むる慶喜の心、夫れから上は、唯一生懸命爲すべき務に從事する外はありませぬ。迷信は心を迷はすものである。進歩を妨ぐるものである。勉勵を阻害するものである。そして一生定まつたる安心を與へぬものである。物忌などを佛敎にてせぬと云ふことは、先づ蓮師の御文に「佛法を修行せんものは念佛者にかぎらず、物さのみ忌むべからずと、あきらかに諸經の文にもあまた見へたり　乃至又般舟經には優婆夷此三昧を聞きて學ばんと欲するものは　乃至自から佛に歸命し、法に歸命し、比丘僧に歸命し、餘道に事ふることを得ざれ、天を拜することを得ざれ鬼神を祠ることを得ざれ吉良日を見ることを得ざれと云へり」と御示しになつて居ります。

最後に心得ふべきは、如何なることありとも、皆菩提得道の緣と思ふべし、眞宗敎的に之れを云へば順逆共に求法入信の緣と心得ふべきことである、然らば順逆共に慶喜の種となる。慶喜の絕えざる人は常に幸福である。

## 迷信（其二吉日良辰）

迷信の中、日の吉凶を云々するものがある、これは日本ばかりでなく世界至るところにあるのである。

### 亡者への御馳走と泥棒

九月一日をオールセーンツデーと稱し、舊敎徒は此日に冥界の人が世に出て來り其家を訪ふものと信じて居るのである。南部伊太利に於ては、二日に幽靈が來ると稱し、此日は山海の御馳走を幽靈や亡者に食はすべく、テーブルの上に陳列し、其夜は家を明けて、家族の者は菩提寺で一夜を明すことになつて居る。翌日家に歸へり見れば、テーブルの上の御馳走は皆無くなつて居る。若し其儘になつて居れば、

其家に不幸あるべしと信じて居るのである。是御馳走は皆亡者が食べたと思つて悦んで居るけれど。何ぞ知らん、其實は、其邊に徘徊する泥棒共が、此日を一年中の書き入れにして待ち、來つて食ふので、餘りあれば胴欲にも持つて歸へるのである。併し、追々其眞相が知れて來たので、十五世紀頃から漸々廢止になりましたが、オーストリヤの田舍には、猶もこんなことを信じて居るものがあります。或る宗派は之れを九月一日とし、或るものは之れを二日とす。日が既に異なるのも妙なものである。是等は祖先を崇敬する念より起つたとすれば、強ち咎むべきことでもなく。別に差したる弊害もなからふが。併、信じ方に依つては迷信ともなり、弊害も生ずるのである。或る者は斯かる祭日に限り、精進潔齊すれば、諸罪消滅するが如く考へて居るものもあるけれども。吾々の心内には、二六時中、煩惱害賊の絶え間がないのである。家業には「休み」と云ふことがあつても、心の修養には休日のあるべきものでない。孔子は「食を終ふる間も仁に忒はず」と云ふて御座る。修養に特別の日はない。修養は常務でなくてはならぬ。死なぬ日は一日もなく、地獄の釜の塞がる日は嘗てない。故に修養や求法には、三百六十五日の中に凶日とてはなく吉日ばかりである。眞宗には「平生業成」と稱し常に之を勸むるのである。

## 勤勉の崇り

四月二十五日以後の日曜日より數へ、四十日目を耶蘇昇天祭と云ひます。英國ウエールス山脈一帶の鑛山の中に於て働く工夫は、此日に勞働すれば負傷をすると信じ、一般に休業するのである。先年或る鑛山の監督者が「そんな筈がない」と云ふて强ひて働かせたところ、果して二人の負傷者を出したので、愈事實であると、今も確く信じて居るとの事である。我が國にも之れに似たる話は、越後魚沼郡八海山の四邊にもある。夫れは四月八日に女は機を織り、男は田を搔くことで、それを八海山の神が嫌ふとかにて、「誰れか之れを犯す時は其年大に旱することあり」と云ふのである。夫れで相互の制裁として此禁を犯すときは旱天の時、家根を引き剝ぐとの

事で、十數年前こんなことを或る愚民が仕て裁判沙汰になつた事がある。或る日に家業を休むと云ふに故障はないが、休まねば罰が當るなどと信ずるは、野蠻極まる迷信である。是等の事は其日に偶然にも二三度あつた爲め。誰れ云ふとなく言ひ觸らした事が、基となつたのであらふ。又そんな事を氣にして働けば、大勢の中に、心理作用から「それ見たか」と曰はぬばかりに、的面に、そんな事が生ずるかも知れない。「若しや」と思ふ疑心があるから、闇鬼を生ずるのである。一體を云へば、稼ぐに凶日などはない、働く日は何日も吉日だ。いつも吉日なら、取り分けて吉日と稱すべきものもない。

## 燭祭日と福の神の御入來

二月二日は耶蘇誕生後、四十日に當るので、之れを燭祭日と稱するのである。昔は此日に於て羅馬の市民が盛んに長い蠟燭を點し、蠟燭行列を仕たものである。スコットランドの西に當るヘブライド島にては此夜ブリイットと云ふ聖人が冥界より現はれ、其人の立ち寄りし家は幸福で、さらぬは不吉であると信ぜられるのである。此晩家人が眠る前に、麥幹にて人形を作り、之れを大きな籠に入れ、赤ん坊を搖藍の中へ入れた如くし。其搖藍の片側きに棍棒を立て掛け。「ブリイット來り玉へ々々々と」三唱しつゝ、眠りに就くので。翌朝起き爐の中を檢べ、若しブリイットが來たとすれば、爐灰の上に、棒を衝いた跡があると云ふのである。こんな事も取るに足らぬ事なれども。信念の薄弱な、欲張りの深き者にすると、若しやと思ふて、一寸遣つて見度くなるであらふ。

## 吉凶の衝突日

七月三十日より八月十一日をドッグスデーと稱し、三伏の熱き時である。狼星と云ふ星が、太陽と共に出沒するからである。ドッグとは犬のこと。其處で埃及では此季節は何事をするにも運がよしとしてある。處が羅馬では其反對に善くないとしてある。一方は吉と云ひ、一方は凶と云ふ。斯く矛盾するのは、吉凶其者が辰の仕

業でないと云ふことが判る。良辰などの理なきことは、是れにて判かることである。然らば狼星の現はるゝ時、何故埃及では運がよいかと云ふに、丁度此星の現はる時節は埃及にてはナイル川の漲る時で、川の水の溢れるは、多くの國で忌むことなれども、埃及では是れが爲め地面が肥へる。隨つて作物が、よく出來る時である。そんな事から此星を幸運の何かである樣に信じ、一事を以て凡てに及ぼし、何事も此時にすれば運がよい、卽ち良辰であると云ふ樣になつたのだと云ふ。羅馬では此時期が尤も不健康な時で人が病氣仕易い。されば氣候不順から、此星に傍杖を喰はせ、不吉なものぢやと仕て仕舞つたのである。

## 結婚の吉日良辰

結婚に就ては、昔から吉日良辰を擇びたがる癖がある。夫れも世界一般である、けれども其說が區々であるから可笑しい。若も日其者にあるなら、何處も一定してなければならぬ筈である。夫れが、さうでないところを見ると、詰まり各自が勝手に理屈を付けたに過ぎぬこと、日の知つた事でない。スカンヂナビヤ人は木曜日のことを、ソースデーと云ふ。「ソー」とは雷神のことである。雷は物を引き裂くが故に、夫婦の中を引き裂かるゝを忌み、此日結婚せぬと云ふのである。印度人は雨天を忌み、歐洲人は一般に金曜日を忌む、けれどもスコットランド人は特に金曜日を以て結婚の吉日とするのである。

## 往亡日に勝つ

支那には往亡日と云ふものあり、我が國にも、之れを用へて今も之れを嫌ふものがある。往亡日とは、正の七、二の十四、三の二十一、四の八、五の十六日、六の二十七、八の十八、九の二十七、十の一、十一の二十、十二の晦日、にして毎月一日宛の往亡日あつて此日に兵を起すものは往いて亡ぶる日であるとのことである。是れも詰らぬ事で、信用するに足らぬ。昔宋の武帝は此日に慕容超を攻めんとせられた。すると一人が「申し上げます」「何事ぢや」「今日は往亡日で軍をするには不吉

なことて御座います。一日御繰り延べが宜しいかと存じます」と其時武帝は「いや苦しうない、往亡日とは此の方が往いて、向ふが亡ぶる日ぢや、向ふには不吉な日であるけれども、此方には大吉日ぢや、皆喜べ」と、其處で構はず兵を進められたが、果して大に勝つことが出來たと云ふ。仕て見れば往亡日も餘り當てにならぬ。又唐の李容朔も此日同樣人の止むるを聞かず蔡を討ちこれも勝利を得た。そんなことを云ふて油斷するものこそ亡ぶるの日である。

不成就日の成就

我が國には不成就日と云ふことあり、正の七、二の八、三の九等に事を始むることを忌む、けれども事實に於て夫れは嘘である、加茂の競馬、祇園會などは不成就日に先例を始めたけれども後世益々繁昌せり。歐米人は金曜日に事始めを忌む、是れも當てにならぬ。成ると成らざるは人にあつて日にあらず。

唯一つの吉日あり

右の如く日の吉凶などは當てにならぬが、茲に唯一つの日ありて、惡事を爲せば一年中の不吉となり、善い事を爲さば、一年中の吉日となることがある。夫れは一月の元日である。諺にも「一日の計は晨にあり、一年の計は、元旦にあり」と云ふが如し。夫れを宿曜經には「一日を建日と名づく、又吉祥日と名づく、宜しく長久の事を爲すべし」と云ふてある。一日は年の甫、月の初めである。何事も物の始めが大切である。戰爭でも初め勝つと勇氣も出て、引き續き其勝利を繼續せんと勵むものである。其意氣や盛なものである。日露戰爭などでは先づ仁川に於て不意に敵艦三隻を沈め先づ敵の荒膽を挫ぎし故に上下一般の意氣盛んになつた。道に心掛くるも其通りて、青春の若き時は一生の元日である、此時精進に勵行せば百事成就するであらう。親鸞聖人は九歳の春に志を立て、出家し玉ふた、そして末代迄ての先達明師となられた。夫れと同時に、年の初めに惡事を慎み、善事に手を着け、煩惱の賊に對して、荒膽を取りひしかば、其自重心は一年中の奮發となり、一生の心意

氣となるであらう。是れ併しながら、日其者にあらずして、心の然らしむるところである。要するに、日の吉凶は畢竟無意味である。三界は心の外にない。禍福は心掛けの如何に依つて別かれ、迷と悟は信不信に依つて決するのである。されば般舟經には「吉良日を見ることを得ざれ」と云ふてある。又和讃には、吉日良辰の迷信に囚はれ、正道を過つものをなげき、親鸞聖人は「かなしきかなや、道俗の、良時吉日撰ばしめ、天神地祇をながめつゝ、卜占祭祀をつとめとす」と歎かせ玉ふたのである。

## 心に吉凶あり

今はそんな事を仕て居る場合でない。吉日なりとて病人が絶へやうか。葬式がならふか、監獄が空しくならふが、雨が降らずに居らふか、風が吹かずに居るであらふか、地獄へ落ちないであらふか、決してそんなことはない。太陽が三百六十五日、時刻を違へず出て來る已上は、何時の日とて同じ事である。唯心丈けはよいときもあり、惡いときもある。日を詮議するよりは心の詮議が第一である。凶も轉じて吉となすは信念の力である。名號の功德である。觀經にも此信に依り此念佛に依り火車が金蓮臺と變じ猛火化して清涼風となることを說いてある。行住坐臥時處諸緣をきらはず。念報佛恩の人には至るところ吉ならざるはなく、年中凶日とてありはせぬ。和讃に「山家の傳敎大師は、國土人民をあはれみて、七難消滅の咒文には、南無阿彌陀佛を唱ふべし」とあり。現世祈りに唱ふる念佛は、眞宗に於て嫌ふところなれども。信念口稱の人は自から其利益は就いて廻はるとの心である。されば何を不足に日の吉凶を詮議し、卜考祈禱などに心を迷はさんや。

## 迷信（其三　病氣平癒）

病氣平癒の祈禱は古代の遺風なり

迷信の一部に、祈禱、呪などを以て疾病を治さんとするものあり。是れも世界一

般の迷習である。先づ其靈驗の有無は暫く之れを擱き、第一に斯ることは甚だ危險なることである。假りに一つや二つ何處かに著しき例があつたとしても、さう云ふことは千に一つもあるまじき極稀なことである。千中無一とも曰はるべきことを僥倖して、醫師にも見せず、全快の極めて多き機會を誤ることは、道としてあるまじきことである。特に吾が眞宗の掟になきことである。夫れよりは平生に攝生に注意し精神の安慰を得て、身心二者を全ふすべきことであります。病起る時は之れを醫者に任せ、其上の事は夫れ丈けの壽命と明らめねばならぬ。病を祈禱で治すことは、太古草昧時代醫術の發達せざる時の遺物であつて、固より宗教の本義でない。今頃こんなことをするものは恥づべきことである。今日でも野蠻の國へ往つて御覽、盛んに病氣平癒の祈禱を遣つて居ります。文明國に至る程其跡は絶へて居ります。宗教も祈禱の臭味を持つて居る程、不完全な幼稚なものであることが知れます。完全な宗教程、現世祈りや、病氣平癒の祈禱などは鮮くあります。我が眞宗の如きは此點から見ても、尤も發達した、立派な宗教と云ふことが出來ます。其處で古代未開の時代には、如何なる有樣であつたかを此處に御話致します。

## 埃及の呪文

世界の一番古い國と云へば、夫れは亞非利加に於ける埃及である。此國は今から六千年程前から開けた國で、其時分の醫法が形象文字で書いた、其時分の記錄に依つて知ることが出來ます。其醫法と云ふものには呪が必ず附いて居る、其文に「オー人間の胃袋に宿る鬼よ。汝の父は首切と呼ばれ、又死神と呼ばる。斯かる名は永へに咀はるべし」と云つた樣な言葉がある。是れから見ると野蠻時代には、病氣は死神と云ふ一種の鬼あつて、腹の中へ入れば、夫れが病氣となるのであること、夫れを治療すると云ふは、呪や咀の言葉を以て、之を追ひ出すこと〳〵信ぜられ、其處で祈禱なるものが行はれたものと見ねばならぬ。病氣の源が四大の不調、身體機關の調子が狂ふところから來ると云ふことを知らないのである。丁度齲齒とは、虫が

食ふことだと、此頃迄、我國の人が思ふて居つたと同じ事である。病源の判斷が既に間違つて居るのだから、其療治の中らぬのは勿論である。併し今から五六千年も前の思想なれば無理もないことである。

### バビロンの呪文

埃及に繼で起りたる國をバビロンと云ふ、此國には楔形の文字を用ゐたものである。其楔形文字の記錄に依ると、醫法は矢張埃及とよく似て居る。呪文の如きも又「人間を食ひ盡す內臟燃燒鬼よ、又內臟に惡戲を爲す鬼神よ。汝より王は免れて、天神の保護に預からんことを祈る。神は彼の(王の)側に立ち、七つの惡鬼を彼(王)れより引き拔き玉へ、王の身より放逐し給へ、再び人間に立ち戻ることを得ざらしめよ」との文がある。是れは埃及の夫れと少しく其趣を異にし。此處には神の保護と加被力とを乞ふて居る。其文も呪文と云ふよりは祈禱文である。此文に依つて察するに、是れは王の疾病の治療を祈りたるものにして。病氣の際熱を發するを、燒燃鬼の所爲と思ひ、又、腹痛を以て鬼の惡戲で、腹の中で躍るものと想像したのであらふ。其處で神の力を借り其鬼共を追拂はんと云ふのが、其頃の思想と見へる。

### 亞米利加土人の治療法

西班牙人が初め亞米利加を發見せるとき、インデアン卽ち亞米利加土人の治療法はどんなものであるかを記せるものを見るに、醫者とは巫の樣なもので、治療に取り掛る前、醫者は自から樹の汁か何かで製したる一種の魔醉劑を呑み、神心恍惚たらしめ。夫れから神を乘り移らしめ、其助言に依り療治をする。と云ふてある。南亞米利加では、醫者が魔藥を呑む代はりに、太鼓、鈴などの鳴り物に依り恍惚の狀態に入り、前の如く神の宣托に依り、相應の呪文を唱ひ、想像せられたる惡鬼の像を畫き、荊棘の如きもので之れを刺し殺して、退治し得たりとし、以て病氣を治すると云ふことである。

### オーストラリヤに於ける蠻人の疾病思想

現今でも、未開の地位にあるオーストラリヤの蠻人は、病氣を以て矢張魔の所爲と思ふて居ります。其想像するところは、ざつとこんなものであると云ふ。夫れは「魔は腹の中に入り肉を食ふ。少しなら一時の病で直るが、さうでないものは死ぬ。夫れが腹に入る時は石の角を以て刺す樣な感じがする。魔が袋鼠の足の骨を以て眠れる人を指せば死ぬ。魔は人の腎臟を持ち去ることがある。人の毛を取り油を注ぎ之れを燒けば其人は死ぬ。魔にやられた死人は之れを火葬にすると、其方向に煙は靡くものである。仍て其方向に命を奪ふた魔があるから、中には其方角に向つて仇討に出掛くるものもある」と云ふのである。是思想は太古埃及、バビロンのそれと略似て居ると曰はなければならぬ。仕て見れば病氣を以て惡鬼の所爲とし、加持や祈禱で之れを治さんとするものあれば、何處の何人たるを問はず、今から六千年前の蠻人と同列と曰はねばならぬ。

## 天壽の命數は力及ばず

已上は極めて幼稚なる國々の例を擧げたもので、今日こんな野蠻な思想を以て居る者は世界に餘りないであらふ。けれども一心一向になつて祈れば神の心を動かし、其加被力で治らぬことはないと信ずるもの、尙世には澤山あるであらふと思ふ。誠心の感應と云ふことは玆に否定するのではないが。定命は祈禱に依つて容易に免るべきものではあるまい。定命盡きぬものならば、醫術に任せても事足るべきである。

恐れ多きことなれど、十善の帝さへ命數天壽の盡き玉ふ時は、力及ばぬではないか。五千萬の同胞神社佛閣に御平癒を禱り、天下の名醫秘術を盡してさへ、御寶算を延ばし奉ることが出來なかつたではないか。斯くて至聖至仁なる　明治天皇樣は御崩御遊ばしたのである。醫術の手當が惡いのではない、五千萬の誠心が通らぬではない、夫れは命數の然らしむるところと恐察し奉るより致し方がない。

無道にして長生するは人の耻なり

假令祈禱に依りて壽命を延ばし得たりとするも、道なければ、其甲斐はない。何

時迄て生きても死ぬる時の思は一つ事である。若道あれば晨に生れて、夕べに死すとも可なりである。と云ふて今殺されて死に度くもあるまいが、叶はぬ迄でも祈りを掛けて生き延びんと云ふ、望もないのが、道を得たと云ふものであらふ。何んとなれば、死は一時の變化で、次の一息には無量壽佛の國に生じ無量壽の息の吹き初めてあるからである。併し後生の有るを信せぬものは、死に際に煩悶が生ずに依り、身體に火の付いた如く、苦痛の餘りに、叶はぬ迄でも、飛びまはるでありませう。人は死に際が大切ぢや、明めの惡い未錬な死に樣は仕度くないものである。私共は古今豪傑の歴史を讀み、其死に際の清きものを見るとき、其人の平素の人格を想像し、其修養の厚きに欽慕するものであるが。之れに反して、其死に際の詰らなかつたことを知るとき、其人の平生を想ひ遣り、一世の功もゼロに仕度い樣な心持がするのである。是れ平生に道を得て居らぬことを證するからであります。死ぬる時程眞面目なものはあるまい。されば其一言は一生の何を思ひ、何を仕て居つたかを告白するものと見ねばなりません。故に人の幸不幸は、命の長短よりも得道の如何にあることであらふと思ひます。

## 信仰あるものは長壽の理に契ふ

然るに平生に南無阿彌陀佛を信じ、無量壽の後生を知るものは、何を苦んで延命加持の爲め諸佛諸神を賴まんやである。「南無阿彌陀佛をとなふれば（信じて唱ふこと）此世の利益きはもなし、流轉輪廻の罪消えて、定業中夭のぞこりぬ」と親鸞聖人は仰せられてあります。命を延ぶる爲めに唱ふる念佛ならねど。心に信心し勸喜愛樂するものは自然長壽のいはれに契ひ、中夭と無理に天壽を損ふとのない德を具するとのことであります。

## 些細な事

小惡を輕んじて殃なしとする勿れ、水滴微なりと雖ども漸く大器に盈つ。

是れは涅槃經の御文で「小惡を輕んせず、小事を慎み、些細な事柄にも細心注意せよと」の、佛の御敎誡で御座います。千丈の堤も蟻の穴から崩れ、五尺の大男も、顯微鏡ならでは目に見へぬ。極小なる黴菌から倒るゝものであります。「是は些細な事ぢや」と等閑に附して、後に大なる損害を蒙ることがありますから、寒心注意すべき事であらふと思ひます。「大切は細瑾を顧みず」と云ふ言葉もあるけれども、是は甚だ危險な事で、吾々が取るべきもので御座いません。

## 句讀一つが千弗

文を綴るに「句切などはどうてもよい。そんな事は仕樣と思へば、誰れにも出來る、些かな事であるから、讀めさへすれば、別に八ヶ間敷言ふ程のものでない」と思ひますけれど、夫れでも此句切を仕ない癖を付けた爲めに、大變な損を仕たものが御座います。其人は米國の櫻府に於て雜貨商を手廣く行つて居るのですが、一日桑港の代理店から「一袋一弗宛、二萬袋賣り手あり、買ふてよいか」と電報が掛つて來ました。處が其返事には「否、値段が余り高い」と云ふので仕た、然るに桑港の代理店では其麥を買ひ、一千弗の損失を招いたのであります。夫れはどう仕た譯かと云ふに返電に句切が仕てなかつたから、解し違つたのであります。「否値段が余り高い」と云ふ此否と云ふ字の次に、星が打つてあれば「直段が高か過ぎるから止めよ」と云ふ事になるけれど、星が打つてないと「ノープライス、ツー、ハイ」となるから之れを譯すと直段は何も高い事はない」と云ふ意味になつて來るのです、是れが爲め、「買ふな」と云ふのを買ふて仕舞つた、是れは句切の星一つないばかりで一千弗の損を仕た御話で御座います。

## 字を書くに麁相臭い男

私の知つて居る人の話に、其人の弟が平生字を書くに麁相で、字體が判らない、手紙をよこしても、判じ文の樣に、家内中寄つて、研究するが、どう仕ても讀めない處がある、甚しいのになると、手紙の要領が判からぬ事がある。或時母の大病に

際し、其弟を呼び寄せんとしたが近頃場所を替へたと云ふて、知らせて來た、其住所が麁末な書き樣である爲め、東京とは判つて居るけれど、あとが何んとも讀めない誰あつて判じ付けるものもないので、よい加減に想像して、電報を打つたが、矢張り屆かない、大事の場合に仕方なかつたと云ふのを聞いた事があります。「書は以て姓名を記するに足る」と楚の項羽が申しましたけれど、上手下手はさて置いて、字體の判らない樣に、走り書きをするは、小事と云ふても、矢張大なる迷惑を人に掛け、自からも損害を招くものであるから、是れも平生の注意が肝要であらふと思ひます。特に年若い人には、此小惡を愼むと云ふことが尤も大切であります。木の幹に刻り付けた小さな文字が、其木の生成と共に大きくなるが如くに。幼少の時の惡い癖は、其年と共に段々生長して來ますから、大いに恐れねばならぬ事で御座います。

## たつた一言が大泥棒のたね

大嘘吐きの大盜も小さい時に、假初の戯言を云ひ、些細なものを取るところから來つたものであります。あの日本左衞門と云ふ大泥坊は何かと云ふに、子供の時余所に往き、履物を無くして歸つた、夫れを母親が叱つて、何せ又其時、人の〻履を履いて來ない」と申し聞かせたから、其後折々こう云ふことのあつた時、人の下駄や雨具を取つて戻つたのが、段々と大きくなり終には恐ろしい大泥坊になつて仕舞つたので御座いますぞ。北國では雪の降る時、箱下駄と云ふものを履き。一口に云へば箱に鼻緒をすげた樣なものである。下駄の裏が平面であるから、雪が齒の間に喰ひ込まぬ。けれども降り立ての雪を上を歩くと、時々其面に雪が附いて離れぬ處がある、最初夫れが豆粒程に些かなものでも、一足毎に新しい雪が其上に附き加はる。仕舞に拳骨大となり、頭の樣な大きさになり、是れが爲め下駄を履み反へし、人は倒れて仕舞ふのであります。人間の一生は此雪下駄を履いて、雪路を往くが如きものであります。身や心に着いた惡き癖の雪は、如何に些細なりとも、一歩

々々と往く間に、針小棒大と成り、此身心を顚伏させて仕舞ふものであります。故に佛様は之れを戒めて「小惡を輕んじ殃なしとする勿れ」と仰せられたので御座います。

## 儉約と吝嗇の水際

偖今度は其反對に、如何程小なる事でも、善事は又大なる德を得る樣に致すものであります。先づ經濟上から御話して見ると、又此道理が實際に見らるゝのであります。何程大金を利ける人でも、極些な費に心を注かぬ人は、割合に大きくなることが出來ませぬ。尤も此言葉の用方を間違いて吝嗇に陷つてはなりませぬ。が、今云ふのは自分の身を奉ずる上に就て申すのであります。其着眼を誤まると、飛んだ事になります。此誤解を避けるには、物を惜むと云ふよりも、物の恩を知ると云ふことが肝要であらうと思ひます。一筋の糸切れと雖ども之を麁末にせぬとは、其糸に籠つた德を知るにあると云ふことです。一文の金も惜むのは金其者を惜むよりも金の德を思ふからです。故に其德を濫りにせぬが着眼點となるから、其處を得れば自分にあると、人にあるとを問へませぬ、青砥藤綱が十文の錢を拾はんとて、大勢人を雇ふたのは、甚だけちな樣に見へるけれども、夫れは錢の德を思ふからである自分の物なら紙一枚も仕末するが、役所のものなら、一束の紙でも鼻紙にすると云ふ樣な事と筋ぢ合が違ふ。本當の儉約と云ふのは自分にあると、他人にあるとを問はず。其勿體が變らぬ事である。此考から出たつゝまやかさは、假令瓜の上で火を燈す樣に仕ても、夫れが他に損失を招かぬ事ならば、夫れは立派な儉德であらうと思ひます。

## 土井利勝と一尺の唐糸

あの土井利勝と云ふ人は能く儉約の意味を解した人と曰はねばならぬ。此人は德川幕府の御老中で大した身分の人である。或る時自分の居間で一尺ばかりの唐糸を見付け、之を拾ひ上げ大野仁兵衛と云ふものを呼び、「此糸を其方に預ける、よく仕

末して置け」と申された相である、「大名ともあらふ者が一尺の糸切れをことごとしく預けるとは何で御座る」と皆さんは考へらるゝてせう。けれども此人は糸其物の德を思ふからであります、其處で三年程經て仁兵衛を呼出し、「先年其方に預けた糸は如何致した」と尋ねられた。「どうも細かしい人である」と思はれるでせう。處が仁兵衛は感心な男である「此處に御座ります」とて腰巾者の中から出して差上げました、利勝は此糸で自身の刀の緒のほつれた處をくゝられた。皆さん如何です糸若し靈あらば「其處を得たる哉々々々々」と喜ぶで御座いませう。何となれば糸は一尺丈けの德を三年越して發輝したからであります。其處で土井侯は家老の寺田與左衛門を呼び出し、仁兵衛は感心なものであるから三百石を遣せ」と曰はれた相に御座います。「前の細かいにも似ず、どうした太腹の人でせうか」と此處に至りて其人の心が知れるでせう。是れは既に申す如く、自からの爲めに物を惜むのではない、物の德の爲めに物を惜むのであります。其處で遺師はこう云ふ事を云ふて御座る、「衣裳等にいたる迄、わが物と思ひ踏みたゝくること淺間敷ことなり、悉く聖人の御用物にて候間、前々住上人は、めし物など、御足にあたり候へば、御いたゞき候由うけたまはり及び候」と、是れは御一代聞書にある御言葉であつて物の我れに對する恩と云ふことを知られた處から來た御言葉であります。如何に我物なればとて、また食べられるものを食べずに捨て、また用ひらるゝものを用ひずに踏たくるが如きは天地の賜を麁末にする罰を、免がるゝ事が出來ないであらうと思ふ。然るに世には故らに物を麁末にして、却つて其太腹に誇るものあり。不了簡と曰はねばならぬ。又體裁を作り、見を飾ると云ふ事ありて餘計な費を厭はぬものもある是等は少しく考ふべき事である。此種の虚飾は、取り分け我國には流行する樣に思ふのである、所謂一種の痩我慢である。此痩我慢の太腹は、餓鬼の夫れの如く徒らに大きく見ゆるのみにして。內實は却つて大なる飢渴を訟ふるもので、志は無下に賤しくなるばかりで御座います。或る我慢男が島原に往き、相方の太夫にふつと煙

草の吸殻を吹き付けた、其吹殻が太夫の膝の上に落ち、大事な着物に燃え付きました。けれど太夫も痩我慢を起し敢て夫れを拂はぬ、やがてかむろを呼び、着替を取り寄せて之れを着替へ、今度其返報として同じ樣に煙管を吹くと、吸殻は客の頭に止まりました。客は又其太腹を見せん爲め、火が髪の毛に燃え付き、肉に燒け付くけれども、ぢつと耐へて居ました。仕舞に鬘を呼び、「頭の掛け替を持つて來い」と命じたと云ふが、前に御話仕た樣に、痩我慢の交際をするは、此男と好一對の取組みと云はねばなりません、話は大分傍き道に外れましたが。兎に角厘毛の費も注意して、嗜むものでなくては大なる所得ありとも、夫れは穴ある瓶の如く、從つて入れば從つて出て、常に缺乏を告ぐる事であらうと思ひます。如何に些かなりとも、心を用ひて費を省く者は、不時の用にも備ふる程一かどの貯も出來るものであります。百圓の月給取人よりも、二十圓か二十五圓の人に却つて貯蓄者の多いのは、卽ち夫れであります。

零碎な時間が人をして大事を爲さしむ

時間の如きも又其通りで、零碎なる時間を、徒らに費消すると、せざるとに依つて、一生に天地雲泥の相違を來します。朝から晩迄、格別遊び暮して居らぬ樣でも何一つ纏まつた事業の出來なかつたと云ふのは、此片々たる寸陰を徒消したからであります。チャーレス、フロートと云ふ人は、五十歳に至る迄靴を製造する職工であつたけれども、彼は豫期せざる休日其外些細なる時間を應用して、數學を研究し其外昆虫學、地質學、動物學などをも學び、後には大學者として諸方の招聘を受け講演を仕てあるかれた人で御座います。我國などでは、時間を重せざる風ありて、至る處の會合が、豫定よりも多少延引する事であるが、此間待つところの時間を應用し、一冊の書物を懷にし、手輕な仕事を持參して流用せば、夫れ丈けでも、一生の間に、莫大なる進歩を見ることであらうと思ひます。我國の負債は十八億圓あるとの事であるが、若六千萬の同胞が、一日一時間の仕事を餘計にするとせば、六千

萬時間となるが、其一時間の仕事を、假りに三錢としても、百日の間に此負債を消却すべき譯である。六千萬の中には子供もあるから、實際は此計算の如く往かずとするも、國民が凡べて一時間宛怠けたとせば、其損害は大したものではありませんか。處が之を見渡すところ、中流已上の人々は、一日一時間は偖て置て、殆んど無意味で暮して居る者が多い樣である上下通じて云ふときは平均一時間の徒消ではなからふと思ふのです。之れは、一國全體の上から見た計算であるが、更に之れを一個人の上に就て云ふと、一日一時間の相違は、一年に三百六十五時の相違となり、五十年の間に一萬八千二百五十時の相違を來すことになる、この勞力を、一時間三錢とせば、五百四十七圓五十錢の相違を來るのであります。若し此時間を讀書に利用せば、優に學者たるを得べきであります。彼のチャーレスフォート氏は此方法に依り、毎日一時間宛を書見に費して數學に於てマストル、オブーアーツの稱號を受け、尙數種の學科を修むることが出來たのであります。

## 或る先生の授業料

或る人が一時間二十仙の授業料を拂ふ約束にて、或る先生から羅甸語の教授を受けた。三ケ月の後何程なるかを尋ねし時、先生が書附けを出すのを見ると、語學の授業料拾二弗と其外に三弗の茫然代と云ふのがある、「茫然代とは何の事か」と聞ひて見ると「君はいつも授業の終はつた後て、二十五分宛ボンヤリと、爲すこともなく遊んて居る、其間自分も仕事が出來ぬのてある、是は私の方に君が迷惑を掛けた代金であるが、君は又自分で其間無益に過したのてあるから之をも合算すると、六弗の損失となつた譯である」と其青年を戒められと云ふことがあります。之れから云ふと、我國の人などは、隨分多額の、ボンヤリ代を仕拂つて居るものと曰はねばなりませぬ。

一句の頌も千金の價値あり

偖已上は何れも世間の上の御話て御座いますが、之を出世間の上に於て承はつて

見ても、又同じ事であります。瑜伽論にも「若し佛法の一句の頌を聞きて、歡喜踊躍するは、三千大千世界の中に充滿する大珍寶聚を得るよりも勝れり、一句の法能く正等覺を引き、能く菩薩の行を淨むるを以てあり」とあります。仕て見れば一句の法と雖も、決して等閑に附すべきものではありません。然るに亦初まつたと云ふ樣な顏付きで、浮の空で聞流して仕舞つたら、夫れは大なる心得違で御座りますぞ法と云ふものは金を貰つた樣に、右から左に移す樣に、直接に感じないかも知れませぬが、一句の法門なりとも忽せにせず、之を持つ時は、錢や金にて買はれぬ、德を得るものでありますぞ。輕んじて之を聞くから、右から左へ拔けて仕舞ひ、取る後から、使つて仕舞ふ月給の樣に、何も殘らぬのであります。若大切に之れを心の裡に保存せば、何時かは役に立つことがあります。或る人が他鄕にありて、久々にて家に歸らんとせし時、平生尊敬せる和尙の處へ暇乞ひに行き、別れに臨むで何か敎へて下されと申した時、利尙は一句の偈文を書き「之を大切に覺へて居よ」とて與へられたのが「長く慮かり諦に思維せよ。當に卒に怒を行すべからず、今日用へずと雖、會當に用事あるべし」と云ふのでありました。此人、數邊之を口ずさみ、御禮を申して、偖我家に歸り着き、見れば入口に見馴れぬ履物がある。よく〳〵窺へば、爐の邊に、此人の女房と、一人の男とが親し氣に話を仕て居るのである。夫れが深夜の事なれば、普通の用事ある人とも思はれず、どうして見ても、間男である。「さては己れの留守に、不義を働く徒者、を入れ二人とも眞兩つに仕て呉れんと今や刀を拔いて躍り込まんとした此時ふと前の句を思出し「待てよ、和尙の敎に、長く慮ばかり、諦かに思維せよとありしが、假令腹は立つとも、輕卒に怒を行ふべきものでない、何は兎もあれ、名乘つて入いり見んと聲を掛けながら中に入れば、女房は「オヤ御歸りでしたか誠に嬉しう御座います」と立つて出迎ふた。其後に續いて「お前は無事で戻られしか、やれ〳〵安心致しました、お前の留守に、「女ばかりと、人が馬鹿に仕ない樣にと、己れが、男の眞似をして、毎晩娘の話連れに、宿ま

りに來て居るのぢや」と、頭に冠りた頭巾を取れば、夫は女房の母親でありました

との事で御座います。夫れで「今日用ゐずと雖も會用事あるべし」と云ふ咏を、適切に感じたと云ふ御話が御座います。是れは佛の敎に就て、一般の上から申した事でありますが、彼の別途不共の敎法、南無阿彌陀佛の一法句の如きは、右から左へ手渡しする邉を待たず、聞信の一念に大般涅槃を超證す」とあります、是れは「些細な事」と云ふ題の下に、御話すべき事ではありませんが、併し文字の上から云へば、是れも僅かに六字に過ぎざる一句で御座います。是れは假令六字でも、法に無量の德を具してあるから、能く念々に無量億劫の生死の重罪を除くことが出來るのでありますから、一般の佛語とは、大に其趣を異に仕て居ることを御承知ありたきものであります、けれども他の佛語も言々句々、之れを聞持するときは、皆此聞信歡喜に入る、助緣ともなり、宿緣ともなるのであるから、決して之を鹿末に聞ひてはなりませぬ。

## 因果應報と長者の自督

下たる者が、上から受くる恩は、善く知つて居るが、上なる人が下の人に惠まれて居る恩を知つて居る者が鮮ない。是れ人の上に立つ長者の戒めとすべきことで、隨つて我が身の仕合せを喜び益々下の者を惠まねばならぬ。下から受けた恩を知り、己れの地位に高ぶらず。下を憐れみ、謙遜に己れを持する者は、其果報も盡きぬてありましやうが。自分が人を助けたことばかり覺へて、下から惠まれた恩を思はず下を苦しめ、傲慢に其身を持するものはやがて其果報も盡き、德なくして、亂りに人に尊敬せられ、惠まれた借金を償はねばならぬ。早きは一生の間に因果的面に廻り來り、晩きは來世に於て數倍の利息を拂ひ、無量の辱しめを受けつゝ之れを返濟して往かねばならぬ、之れを因果應報の理に照らし。佛說に鑑みるも昭々として明かなことである。

## 角力取と柔術家のわざ較べ

或る處に鈍州と云ふ角力取と、隼人と云へる柔術家がありました。鈍州は體量五十貫もあり相な、大力の角力取であるけれども、總身に智慧の廻り兼でか、其名の如く鈍なものであつた。又隼人と云ふ柔術家は、小さい男で、其業も格別勝れて居らぬが、其代はり小賢く目から鼻へ抜ける樣な機敏の男でした。或る時二人が互に其道の自慢を仕て。角力取は「いくら柔術が巧いからとてそんな小男が己れに敵するものでないと云ひ。柔術家は「いくら力あつても柔術の法にはかなはぬと云ひ、互に言ひ爭ふて何時迄も果しがありませんでした。其處で側の者が彼等に勸めて勝負をさせる事になり。「投げ殺されても構はん。蹶殺されても言ひ分はない」と約束し、大勢の見物人の中で優劣を極めることになりました。さー勝負がどうなる事であらふと見物人は片唾を飲んで見て居る。其中に。やつと掛聲の下に雙方暫くは睨み合ひ、互に呼吸を圖り、角力取は、隙があつたら引捉ひてたゝき潰して呉れんと思ひ。柔術家は弱みがあつたらつけ込んで業を仕掛けんと、互に秘術を盡しましたが、其中に角力取は隙を窺つて隼人の腕を捉ひ、片足をも確かと握り、目よりも高く差上げ「うん」と力を込めて之れを「どし」と投げ殺さんと仕ました。隼人はどうすることも出來ません、命は風前の燈、角力取の手に握られたのであるから、「もー叶はぬ」とは思つたけれど。其處が小賢しい丈けに、默つて居らぬ。上へ差上げられながら「さー投げるなら投げて見ろ、投げられる時に貴樣の、どてつ腹を蹶り。殺して呉れるから」と云ふと、鈍な角力取ぢやから之れを聞いて。其男を差上げながら「助けて呉れ々々々」と叫んだ相です。隼人は頭の上に仰向になつて居ながら「どうだ降參したか」と却つて威張つた相である。助けて遣つた隼人は實は角力取に助られたのであります。

惠まぬ人に惠まれて居ることが多い

此れと同じく。世の中にも助けて遣つたと思はれて居る人に、却つて助けられて

惠まぬ人に惠まれて居ることが多い

居るものが澤山あります。「うけつぎし國のつかさの甲斐もなく、めぐまぬ民にめぐまるゝ身は」と是れは光圀公の述懐であります。「己れが治むる民を、惠むとばかり思はれて居れど。我が身に何程の德ありや。夫れに百姓は年々の年貢を納め呉るゝに依つて、吾が身は骨も折らずに司の面目を保つて往くことが出來る。自分が惠みもせぬ民に惠まれて居るのだ」と、御自身の德を忘れて、百姓の恩を思はれた歌である。此心得なればこそ明主として世に尊敬せられたのでありませう。地主は小作人に對して恩あるが。之れと同時に地主は小作人ある爲め、田を作らずに、米を得るなれば、卽ち小作人に惠まれて居るのである。金貸も貧乏人あればこそ金を貸して生活して往けるのである。金持ば貧乏人に養はれて居るのである。夫れを貧乏人を助けてばかり置く樣に思ふたら冥加が盡きるでありましやう。主人は奉公人を飼ふて置く樣にばかり思ふて居れども、實は奉公人が働いで呉れ、御主人を上へ差し上げて呉れるから主人としての體面が保てるのである。將校は兵卒を敎養するとばかり知つて、兵卒が其手足となり、胸の勳章も彼等の身血から成り上つたことを知らねば良將とは云へぬ。宗敎家、敎育家は人を敎へ、人を救ふとばかり心得て、よい氣になり、自身又敎へらるゝもの、救はるゝものから、救はれて居ることを忘れて居つては罰が當るであらふと思ふのである。官吏は人民の世話燒くばかりの樣に心得て。人民に惠まれて居ることを忘れ、威張つて居るならば終に其應報を免れぬでありましやう。斯の如く相互に恩あることを知らねば其人の福得は永く盡きるでありませう。此恩を佛は衆生恩と名け、四恩の一として忘れぬ樣にせよと敎へ玉ふたのである。牛や馬の如きも。人間の財産であるけれども。人間が彼等を養ふよりも、彼等に養はれて居ることをも知らねばならぬ。下から上に對する恩は割合によく解せられて居るが、上の者が下から受けて居る恩を解せぬ者が澤山ある。そして上に居りながら人から尊敬を受くるを特權の樣に心得て。其德なきに恥ぢざる者が澤山あります。故に社會の上流に立つ長者は日に三度此事を思ふて、其身の不德を責め。

下に向つて愛憐同情の心を起さねばなりません。

社會の上流に立ち、一家の長者となり、相當の尊敬を受け、下から恵まれて居りながら。身に夫れ丈けの德もなく。夫れ丈けの義務も盡さず。之れを一つの權利の如く心得なば。是れ恩を借りて返濟せざる痴れ者である。其借錢や未來永劫身に纏ひ、之れが義務を果す迄は苦患盡きぬでありましやう、因果は廻ぐる小車の如く早晩報ふものと知らねばならぬ。

## 機の深信と反省

### 機の深信の解

機の深信とは自分の身の淺間しさを知り、自分の力で佛になるべき價値のないことを信ずるので、之を言ひ換ゆれば我身の缺點と弱點とを知り。滿德圓滿なる佛に歸し、至德の尊號を仰ぐ心得になることであります。此心得にならせて戴けば。疑もなく願力に乘じ決定往生を得るのみならず。世の中に生活して往く中にも、謙遜己れを持し、自から虔んで、其行狀を守ることが出來やうかと思ひます。故に機の深信を世渡りの俗諦門に及ぼすときは、今日の言葉で云ふと、反省と云ふ二字に當るのであります。

### 反省の解

反省とは自から己れを省みる事で、人に缺點や氣に入らぬ惡い事があつても、其方を見ず、其人を咎めず先づ第一番に自分の手許に狂がないか、間違はないか、不都合はないかと、調べても見考へても見ることであります。何程考へても自分が惡いのではない、人が惡いのだと見へても、猶何度も自分を取調べて見る事です。煙管を手に持ちながら「煙管がなくなつた」と其邊搜し廻はる人がある。之れは何か妄想して居るからである。人間は兎角「己れが々々々」の妄想が強い。夫れぢやから動もすると自分に不都合な弱點を持ちながら、他人の不都合を搜し廻はるものであ

る。世の中を聞いて歩るくと、皆他人が悪い樣に言ふて居るが、自分が悪いと言ふものが滅多にない。是れから見ると皆善人ばかりの樣に思はれるが、實際之れを見ると悪人も亦多い樣ぢや、仕て見ると善いと云ふのは自分免許で佛の認可し玉はぬものと見へる。自分免許の善人ばかりでは、いつ迄立つても、世の中が善くなる氣遣はない善人多くして、天下益々亂れは仕まいかと氣遣はれるのである。だから善人の免許は手づくりてはいかぬ。人間から貰つたのも當てにならぬ。之れを佛の智慧に照らし、大悲廻向の御手數を煩はしたものでなくてはならぬ。手前免許は烏の雌雄と同じく、何が何だかさつぱり判らぬ。

## 寢ぼけ先生と寢ぼけお客

或る處に善く寢る癖の先生があつた、朝は十時頃起き、朝飯を濟ませば、煙草盆を頭に臂を枕に轉りと横になり其儘十二時迄又眠るのである。晝飯を濟ませて、又晝寢を初める。斯くして、朝から晩迄寢續けをする先生でありました。或る日之れ



ゐ善く寢る御客樣が午前十一時頃尋ねて來た「御免」と云ふても案内がないから、上つて見れば先生煙草盆を枕に寢て御座る。やア先生まだ寢て居るわい目の醒むる迄己れもちと居眠りなりと仕樣」と腕を顎に當てがいながら。うつら〳〵と寢入つた其中に主人公は目を醒まし之れを見て「おやお客樣がいつの間にか來て眠つて居る、餘程寢坊と見へる。まーきやつが目を覺す迄で、もう少しばかり寢て置から」と又横になつた儘寢入つて仕舞ひました。其中にお客は目を醒まし「モー起きて居るだらふ」と見れば、主人公は今起きて寢たばかりの後であつた。「何んだまだ寢て居るわい。こりや驚いた。まー己れももー少し寢て遣れ」と又寢入る、斯くして主人が目を覺せばお客が寢、お客が醒むれば主人が寢ると云ふ樣に終に一日の日も暮れて仕舞ひ、夜になつて雙方共に目を覺し。先生が寢坊ぢやから己れ迄、一日寢入つて仕舞つたと云ひ、先生も同じことを云ふてお客を笑ひ、互に笑ひ比べを仕たと云ふことである。是れは作り話でも何んでもない、世間に毎日見受くる事柄である。之

れを具體的に云へば。亭主は遊びに出て、夜遲く歸りながら女房に家の不始末を責め。朝寢を仕ながら御飯や御汁の冷いことを詰り。「貴樣の心掛けが惡いから、家の居心がよくないと云ひ。女房は亭主の留守に買ひ食を仕て錢を減らし、米櫃が空になつたとて亭主の働なきを怨み。親父は鼻毛を長うして靑樓に通ひながら。子息の放埒を責め。息子は親父の道樂を數へて、自身は仇し女と善い仲になり。皆自分の惡事を棚に上げ。短所や缺點を祭り込めて。他の方を責めて居る。會合なとあれば前に來た者は、「どうも時間を重んぜぬから困る」と云ひ。次の會には先に往つても詰らぬからもー始まつたか聞いて來い」と一番後から來る。斯くして代る〴〵人の晩きを歎いて居るのである。西園寺內閣起れば、他の一派は姑息政略と笑ひ、桂內閣之れに代はれば、政友會は之れを閥族と罵り。政友內閣組織せらるれば、憲政一派は之れを變節と嘲る。代る〴〵人の短を責め相攻擊するは、居眠りを以て。寢ぼけ先生を待ち。互に人の醒むるを待ちつゝ、自身却つて眠れるが如きものである

まいか。人の醒むるを待つよりは、自身先づ眠らざにる如かぬのである。警世に心掛くるものは徒らに世を警めずして、自身を警めざるべからず。一家を治むるに如かず。火の用心を呼びつゝ。自身火事を出すが、世の中の有樣である。火の要心は先づ自身に於て爲すべきである。自身が夫れ〴〵要心して。火事を取締らば、世には火事なきに至るであらふ。

## 反省と射的

反省とは射術の如きものである。矢が的中せざる時、よく〳〵其手許を吟味すべきである。矢の外れたるは的の惡いのではない。押手が足らぬか、引手が上がりしかを取調べなければならぬと同じく。他人が氣に入らぬ時。先づ自身に反へりて責むべきことてあります。

「曉のねざめ靜かに思ふかな、わがまつりごと如何あらむ」と是れて先帝陛下の御製である。吾々臣民の上に善い事があるにつけ、惡い事が起るにつけ、常に此御製

の通り「わがまつりごとは如何に」と、曉の寢ざめにも、大御心を煩はせられ。反省御聖慮を痛めさせられたので御座います。誠に恐れ多いことでは御座いませんか、十善の帝でさへ斯く己れを責めて此國を治ろしめて玉ふた事なれば。何事も及ばぬ勝ちの吾輩が身にして、自から省みることもなく徒らに、人を責めなば陛下に對し奉り誠に恐れ多い事ではありませんか。

## 記のつかぬ惡人

「人つく牛をば角をとり、人食ふ馬をば耳をとりて、其しるしとす、しるしをつけずに人をやぶらせぬるは主の過なり」と云ふことがあります。惡人を爲して監獄へ入れられた罪人は此しるしを付けられた、牛や馬の樣なもので、人は之れに用心するからよいが、世の中には、口に憂國の志士など、立派な看板を下げ。或は紳士など云ふものもありて、如何にも感心なことを言いながら。人に向つては其不法を責めるが、自身の行はと云ふと、お話にならぬものが隨分あります。是等は記の附けてない、惡牛、鬼馬と同じく、尤も恐るべきものであります。こう云ふことは吾々にもないとは云へぬことであるから、隨分恐れて虔まなければなりませぬ。

「賢を見ては齊しからんことを思ひ、不賢を見ては內に自から省る」と孔子樣は曰はれましたが、之れと同じく、善人を見ては齊しからんことを思はなければならぬ。惡人を見ては、自分も其一人ではなからふかと、恐れねばなりません。墨子の言にも「君子は水を鏡とせずして、人を鏡とす」とありますが。佛の道に心掛くるものは人を以て鏡とするばかりでなく。常に人を以て鏡とすべきものであらふと思ひます。佛を以て鏡とせば、吾が身の小慈小悲もなき、淺間しきものなることが知れるであらふ。眞に罪惡生死の凡夫なることが知られるであらふ。併、唯自分が惡いと知つた丈けでは、別に得るところもないが、更に佛の鏡其者が如何に美しきものなるかにならひ、「佛の大悲は苦者に於てす」なる、大人を學び。惡人を咎めず之を憐むの念慮を起さねばならぬ。

## 隨處開拓

隨處開拓と云ふことは、至る處に於て樂地を見出せと云ふことである。夫れが若し、樂地でないならば、何等かの工夫と、何等かの修養と努力とを以て、自分の住み善ぎ樣、樂しき樣に荊棘を拂ひ、草蒙を開き、自分が氣に入る樣に開墾せねばならぬ。夫れを困難であると放棄て仕舞ひ、見込が立たぬと悲觀して、自分から退却する樣なことがあつてはならぬ。又そんな心意氣では至る處で失敗し、一生落ち付かずに苦まなければなりません。棘や草木の茂れる原野を初めて横行せんとする時は、其難儀苦勞は一通であるまい、或る時は樹の枝に衣服を釣られ、或る時は剔ね飛ばされ、或る時は荊棘で足を搔きむしり或る時は毒蛇に嚙まれるなど、其難儀は一々數へ盡されぬであらふ。けれども一度通りし處は、自から跡をなし二度通りし處は、小路を作り、數十度重なれば苦もなく通行出來るのみならず、絶へず往復せば草も其處丈けは生ぬ樣になり、木も其邊は枝を損じて別の方に延びて往くであらふ。茫々たる棘の木の茂つた原野の中にも斯くして道が出來、懷手して往けるのである。彼の二の宮翁の如きは味氣なき貧困の中に生れて來ながら、一生の運命を開拓し、古の豪傑が種々の難儀に遭ひながら、其中に立つて善く其身を立てたのも皆此隨處開拓と云ふことを仕たからである。

### 隨所開拓の人に不幸なし

隨處開拓の人は之れに如何なる不幸を以てするも、終には之れを開拓して幸福と爲すものであります、之れを名けて眞に勇ある人と稱するのである。彼の鬼將軍と云はれた佐藤大佐の如きは、二十七年の役、元山から平壤へ道もなきところを衝き進み、敵の背後を不意に襲ふた美談もあるが、此人は部下を訓練するに常に愉快の二字を以てせられたと云ふ。如何なる炎天にも、如何な寒き時にも、如何な困難に遭遇しても「是は叫はぬ」と云ふたことはない。常に「愉快ではない」かと曰はれ

たと云ふ。一寸聞くと疲せ我慢の樣に思はれ樣が、よく考へて見ると疲せ我慢ではない、眞に愉快に相違ないのである。若しも困難面に現はさぬと云ふ丈であつたならば、或は疲我慢かも知れぬ。けれども古歌にも「憂き事のなほ此上につもれかし限りある身の力ためさん」とある通り、自身の力試に其困難に當るとせば、野球の試合や銃鎗の勝負を申込むと同じく、自から好んで當るものであれば眞に愉快を感ぜねばならぬ。佐藤大佐の如きは、こう云ふ考で、愉快の二字を以て難事に當られたことゝ思ひます。夫れで吾々が處世の上に於て、若しも難儀が湧いて來た時「我れ程不幸な者はない」とか「こんなに强ふて何んとせうとか云ふ情けない心を止めて置いて、向から申込まれた試合の如き用心と心意氣とを以て之れを迎ひ。心膽を練り、心術を盡し之れに當るの覺悟あらば、隨所開拓と云ふことは決して机上の空論でないことが知らるゝてあらふと思ひます。さすれば自から一條の活路をも作り、終には其中に樂地を見出すことが出來るであらふと思ひます。若又其れにても彌ぎ切れずば、旗幟堂々爲すべき道を守りて立派に討死する覺悟さへあれば、平生は左迄不愉快と感ぜず、落付拂ふて物事に從事し得らるゝことゝ思ひます。

## 人の運命と草木の種子

人間は業報の所感なれば、此世に於て萬人同一の果報を受くることが出來ぬ。故に生れながらにして、貧賤なるもあり、富貴なるものもある。天才なるもあれば鈍なるもある。猶天上より一把みの種子を撒き散らしたるが如きものであります。或る種子は肥へたる地の上に落ち、或るものは痩せ地の上に落ち、或るものは根の下し樣もなく、芽の生え樣もなき石の上にも落ちるものである。石の上に落ちたものはよく〳〵の不幸ものと曰はねばならぬ。私は或る年瓦屋根の上に三ヶ年間生え續けたる蓬を見ました。瓦の上では滋養分の吸收も出來ないに、どうして根を下したものか、最初の年は二寸ばかり生長して其翌年は同じ根より芽を生じ三寸程に生長した、三年目にも夫れより大きくはならない樣であるが。別に枯れ切つて仕舞はぬ。

今後何年持ち續くることか、今から豫想も出來ないが。兎に角瓦の上にても、根を下ろし、芽を生ずると云ふは、感ずべきことである。瓦の上にも芽を生やす逞さへある位ならば縱令瘦せ地であらうと、落ちた處に根を下し、芽を生ずべきは勿論である。併し種子夫れ自身から云へば、落ちた地面に就いて幸不幸もあらふが、各其全力を盡し、其生成を遂ぐる時は、終に何れを幸とし、何れを不幸とも云へぬ事になる。瘦地に生いた樹木は亭々たる大木となり、建築の用材となることは、如何に盡力するとも出來まいが、其代はり蜿々として屈曲せる、古木となり、或は雅致にして趣きある庭木として、風景を添ひ、人の目を喜ばしむるものとなることが出來る人間も先天的の運と、境遇とに依りて、國家建築の用材たるべき大政治家と、或はなれぬかも知ないが、其運命と境遇とに應じて努力せば一方に技藝家となし、精神家となり、百世の後にも其名は朽ちぬ大人物となることが出來ます。吉野の山に風にも折れず平和の中に生成せし大木も、明石や舞子の浦風に吹き曲けられた老松も、其價値に於ては甲乙ありませぬ。大臣となつて國家を經論するも、嵓穴の志士となつて教を垂るゝも、其人物の價値に輕重はありませぬ。是は、其一例に過ぎぬが、老農も豪商も、名匠も何も、個も皆夫れ相應に趣あるものなれば、何になりても一つことであります。要は隨處に其運命を開拓するにあるので、他の地位を羨まず、才を羨まず、運を羨まず、自己の運を悲觀せず、境遇に泣き言を曰はず、各其能と地位と境遇と場所とに應じて其全力を注げば、皆隨處に樂を得、運命の開拓は爲し得らるゝでありましやう。已上は不幸の地、不運の境にある人の心得とすべきものであるが。更に幸福なる位置、幸運の境遇にある人の心得ふべき事柄を左に申述べて見ませう。人間は如何に幸福でも一方には又意に叶はぬことも隨分あるものであります。夫れを悟らざれば樂地に居りながら却つて不快を感ずることが往々あります。故に如何なる逆境にある人や、不幸な人にも、必ず見出すべき一二の樂邦があると共に、如何な幸福な人にも必ず一つや二つ意に契はぬ事も附いて廻はる

ものと知ねばなりませぬ。其意に契はぬ處が、却つて其人をより幸福にならしむる秘密の關門であると知らねばならぬ。此關所を平和に通過することが出來れば至妙の樂地に至ることを得べく、此關門を無事に通り拔けること出來ねば其人は永く至妙の樂土より放逐せらるべきものであります。

## 馬鹿臭い處に秘密の寶藏あり

之れを具體的に云ふと、どんな身分の人にも必ず一つや二つは馬鹿臭い處があるものです。色々の職業に從事して人は必ず其味が判つて居るであらふと思ひます、門外漢である時は或る職業が羨ましく思はれることもあれど、實地其門に入りて研究せば必ず馬鹿臭きところが見へて來る。故に勞働するものから見れば頭腦を使ふて生活し往く人の安樂が羨しく見へるけれども、其反對に頭を使ふべき職業に入りて勞働者を見れば、却つて夫れが氣樂に思はれるものである。夫れと同じく官吏の目から實業家を見れば其地位を羨ましく思ふけれども、實業家より官吏を眺むれば亦榮耀にも考へられるのである。斯の如く他人の持てる花が羨まし、自己の持てるものが詰らなく見へる樣ではとても、至妙の樂土を見出すことが出來ぬ。そんな事では、縱令、至妙な樂土に居りても其心安からぬことでありませう。

## アビシニヤの王子

アビシニヤ王は數多の王子王女を持ち、或る時考へらるゝ樣には「彼等を安樂に幸福に暮させんには何んとしたら善からふ。若しも彼等をして世の中の風や浪に晒さしめず、人の難儀や苦勞話を耳に入れず、目に見せしめない樣に仕たらば、彼等は浮世の何物たることを知らず、安樂に王侯の富を樂むことが出來やう」と其處で人を遣はし國内に於て普く調査を爲さしめ、終に一つの地に擴大なる立派な御殿をつらい、其處へ一族の人を移されたのである。其地は四方何十丈と衝立の如き直立した岩や山壁を以て圍まれ、何處からも出入の出來ぬ一つの圍ふた地面でありました。此處へ色々の食料や其他の物を運ぶべく唯一つの入口を設けられ、之れもトン

ネルの様な穴の入口でありました、其入口には王が親任せる役人を遣はして其番人にならしめ。嚴重に他から來るものを取締らせ斯くして内外の交通を遮斷せられたされば王の一族は此深宮の中にありて、世と交通を絶たれ、浮世の困難やら、凡ての悲しき事から遠かり、毎日美食美味に飽き、求むるものは何にても供給され、欲するものは何にても得らるゝので何一つ不自由を感ずることはありませんでした王の一族は之れで滿足せられたらば此上なき至妙の樂土であるが、唯一つ苦になるのは「何故世の中から斯く遮斷せらるゝてあらふか」と云ふことで之れを思ふと矢も楯もたまらぬ、是れが爲め何れも深き苦惱に陷入られたのであります。中にも季の王子であつた、ラセラスと云ふ御方は是思の爲め食も進まず、歌舞音樂も凡ても娯樂も氣に入らず、唯怏々として塞ぎ居り、殆んど病氣にならんばかりに身體も疲せ衰ひました。侍臣は色々に慰め奉れども、其心を樂ますことが出來なかつたとある。唯「此處を出してさへ貰ふたらば」と旦夕夫ればかり悲まるゝので、此事を侍臣から王に申上げる。然らば勝手にさせよとて其請を容れ「終に世の中へ出して遣られました。王子は大層喜ばれ「是れでこそ予も仕合せなり」と。偖て、一旦世に出てゝ、色々の有樣を見、色々の人に尋ね問ふに、思ふたよりは世の中も詰らぬものにて、樂しきものは一つもなく、至るところ唯愁歎の聲のみであつたので、王子は再び悶られ。「之れを思へば、已前　王宮生活が至妙の樂土であつたのである、夫れを自から心の迷より、好んで難儀に陷入つたと云ふことが知られ、更に父王に請ふて、已前の身に歸へられたと云ふことが御座います。

## 強いて不足を見出す人

此三子と同じく、人間は仕合せの地位に居りながら、之れを樂むことをせず強いて其中より不足を見出し之れに依つて折角の好地位を滅茶々々にして仕舞ふものであるから、よく〳〵其邊を考へなければならぬ。無病の身から病氣に惱める人を見れば、大なる幸福である。其日の食に差支ひ、懊惱する者から見れば、假令上官に

氣兼しても、人にちやほや曰はれずとも、是れ大なる仕合せである。又雨の漏るを防ぎ兼たる者から見れば、草の庵に生活する人でも、多幸多福と曰はねばならぬ。夫れを幸福と思はず、此處に何か缺點や不足を見出し、馬鹿臭いと云ふ考を起すから、自分の心が再び不平の雲に包まれるのである。身分や職業なども其通り、何にでもあれ一つの利もあれば、一つの不利もあるものである。其處で善き心掛けの人は其中から不利なる點を見出さずに、利ある點を見出し、此れを利用して其樂を求め其運を開拓すべきものであります。若しも馬鹿らしき點があり、不利なる事柄があるならば、之れを苦にせず、氣に掛けず、之れが我をしてより大なる幸福を解せしむる一つの謎と思はねばならぬ。「三界唯心」と佛の宣ふたのも卽ち此處である。さう思ふて明らめさせるのではない。さう思へば實際に其通りになることが出來るのであります。

故に人其境界に應じて、比較的に樂しき生活を求め。其身を幸福ならしむべき秘訣は隨所開拓の四字を服膺すべきである。一は努力に依りて不幸の地をも樂土に自分から改作することで。他は心の修養に依りて、現在持ちつゝある長所と利得とを巧みに運用し、そして現在の境遇に反抗的不平心を起さぬ樣に慎まねばなりませぬ。

## 勝手に迷ふ人

更に之れを後生の一大事に望めて考へて見るも矢張同じ事で、吾々が末法時中に生を受けながら、無條件に其儘救ふの如來の弘誓を聽き得たるは、此上なき仕合と思はねばならぬ。然るに或る者は其中から、態々不足を見出し、「此儘の御助け」が氣に入らぬと云ふものがある。是れ又ラセラス王子と同じ種類の人物と曰はねばならぬ。其大悲に漏れ再び流轉生死とさまよふ樣になるのは、如來の慈悲の至らぬのではない。其人自からが勝手に迷ふものと曰はねばならぬ。彌陀に四十八願ましませども、分けて有難きは「其儘救ふ」の第十八願である。此願あるに依つて十方衆生の呼び聲が屆くのである假りに何かの條件を附して見られよ。假令へば五戒を

守るを往生の因と定め玉ふたとせよ。破戒の者は助かることが出來ぬてはないか。若一聲稱佛を以て往生の因とせんか、聞き得る一念に死んだ不幸短命の者は御慈悲より漏れて惡道に沈まねばならぬ。圓頓一乘の本願なるが故に、逆惡も攝するのである。無條件の此儘なる故、十方衆生が往かれるのである。夫れを超世無上の誓願と感謝せず、之れに向つて不足を訴ふるものは、至妙の樂土よりわざ〳〵這ひ出て、猛火の中に自から好んで飛び込むものと曰はねばならぬ。

## 世の中は一種の大學なり

菩薩は道に住して諸法の眞義を見る。眞とは實義なり、實義とは所謂虛空ならざるなり。卽眞如なり。眞如は自から內に證る所のものにして、文字の能く之を施設す所にあらず、何んとなれば眞如は一切の文字言語及び戲論を超過えたるが故なり眞理は至るところにあり

是れは寶雨經の御文で御座います。此文の中に眞如と云ふ御言葉がある、此眞如は眞理の事にして卽ち證の事で御座います。證は一天の月影が、田毎に映るが如く若くは草の葉に置く露の上にも映るものであると同じく、證の眞如の月は、何の上にも必ず宿つて居るものであります。唯其物の大小に依り、一つの月影が、大ともなり、小ともなるが如く。之れを見る人の眼の大小に依りて、大なる眞理を發見するものもあり、小なる眞理を發見するものもあります。眞理に大小の二つは無いけれども、之を見る眼に大小の違があるからです。故に佛の敎に依りて、眞理を發見するものもあり。ニュートンの如く、林檎の落つるを見て發見する眞理もあり。ワットの如く鐵瓶の沸くを見て發見する心理もあり、皆さん方が勉强の結果、夫れ々の仕事の上に發見する眞理もあります。そうすると涅槃の眞理、引力の眞理、蒸汽の眞理、勉强の眞理と、澤山な眞理があつて、皆別々の樣に見へるけれども、決して其樣な事はない、眞理の本家本元は唯涅槃の一つであつて、其他の證りは皆其支店に過ぎな

いのであります。丁度田の中の月、露の中の月と同じ事であります。けれども此小さい月は、天上の月と同じ形を仕て居るのであるから、本統の月影を拜むことの出來ない中は、責めて此小さい月なりと拜むで見度いものであります。處が有難い事には其月影は何にても映りて居ると云ふ事であります。今の御文に「菩薩は道に住して諸法の眞義を見る」と仰せられたのが卽ち夫れであります。「諸法」とは佛語であつて、之を普通の言葉に直すと「有らゆる物」卽森羅萬象の事である。「眞義」とは今の眞如卽ち證りの事である。仕て見れば、何からでも證を開いて、迷の境界を卒業することが出來るのであります。これから見れば、世の中は、一つの大學校と曰はねばなりませぬ。大學校を卒業すると云へば、今迄で學んだ事から、或る眞理を見出し、之れを論文に書いて出すことである。詰まり今迄敎はつた事が、腑に落ちたら出來る事である。けれども普通大學と云ふて居るのは、あれは小仕掛の大學である。吾々は皆此小仕掛の大學にはいることが出來ないと云ふて、何も悲む事はない。吾々は夫れよりも數百千倍大きな大學に入つて居るのである。夫れが皆さんに判つて居りますか。普通の大學は、多少金がないと入ることが出來ぬ。吾々の今入つて居る大學校は、金がなくとも、卒業が出來るのであります。死んだ學士は、普通の大學から出て來ることもありますが、世の中の大學を卒業仕て出た人に、活用の出來ぬものは一人もありませぬ。亞米利加の大統領リンコルン氏は、貧乏で、大學に入ることが出來なかつたけれど。世の中の大學を卒業仕た故に、大統領の中ては、立派なものでありました。リビング、ストン博士は學校處ではない。貧乏であつた爲め、十歲の時から紡績會社に働かせられた。けれども世の中の大學を卒業仕た故に、ドクトルの稱號を得、亞米利加探檢の奇功を樹てた人となりました。こう云ふ風に、數ふれば、一々指を屈するに遑もない事ですから。皆さん方も皆此世の中の大學を、卒業する樣に、御修養ありたきものであります。卒業と云ふても、決して一樣のものでない。或る者は學者で卒業するもあり、或る者は忠實で卒業するも

あり、或る者は親切で卒業するものもあり、又或る者は何もかも一時に仕揚げて卒業するものもあります。全科卒業と云ふと、ちと吾々には六ケしいかも知らぬが、一科や二科の卒業なら、心掛け次第で、皆さん方に出來ぬ筈はないのですから。「私共の樣な者が」などと自分を餘り麁末にせぬ樣に願ひます。

「世界大學の書物は不文の文字なり

處で世の中の大學に用ゆる書物と云ふのは何かと云ふに、夫れは文字で書かれたものでない。皆さんが目に見、耳に聞くことが、皆立派な眞理を含むだ書物であります。故に佛樣は、「常在の說法、不文の御經」と仰せられて御座います。格別代金を出さずとも求められ、持ち運びせずとも、至る處にあるのであるが、皆さんに夫れが讀めますか。「イヤ毎日見て居ります、毎日讀んで居ります。けれども一向面白い事もありませぬ、詰らぬ事ばかり」と人が曰ふかも知れぬが、夫れは見樣が惡いのです。

世界大學の敎科書は三眼を以て讀むべし

大體から申しますと、世の大學校の書物を見るのには三つの眼がなくてはなりません。三の眼とは左右兩方の肉眼の外心眼の一つを有たなければなりませぬ。多くの人は唯肉眼丈けで見るから、面白くも何もないのである。一休樣が、ある時、茶屋に憩むで居らるゝと、片目な木鉢賣の翁さんが、其傍に來て、色々戲れたとき、一休樣も戲れに「夜晝が一度に來たか木鉢賣あいた眼もあり、あかぬ眼もあり」と歌を詠れたと云ふ事であるが。多くの人は皆此木鉢賣と同じく、明いた眼もあれば明かぬ眼もあるから、夫れが本統に讀めないのである。普通大學の書物は片目でも讀めるけれど、今の書物は今一つの心眼と云ふものが、あいて居らぬと駄目であります。此心眼の明いて居る者が菩薩である、故に今の御文に「菩薩道に住して諸法の眞義を見る」と仰せられたのであります。菩薩とは自利利他の二つを全ふするものを云ふ、唯自分の爲ばかりを考ふるもの之を聲聞と云ふ。菩薩の地位に進むと、

自利と云ふことよりも利他と云ふて、人を利することに重きを置くのである。此利他と云ふことは、慈悲の眼がないと出來ませぬ。世の多くの人は唯肉眼てばかり物を見て居るが。此慈悲と云ふ心眼を塞いて居る、自分の爲めになる事なら喜ぶが、人の爲めになることは喜ばぬ、因て夜晝が一度に來た樣に、喜んだり泣いたり仕て居る。慈悲の心眼を具へたら、世の中が今少しく立派に見へるてありませう。證りも開けませう。眞理も發見出來ませう。大學校の卒業も無論出來るに違いありませぬ。夫れは又〻故で御座りましやう。か。之を委しく御話すると云ふことは、佛ならでは出來ぬ事であるけれど、併しさうばかり云ふたのでは、想像も付かぬ事になりますから、極淺い處で其一つ二つを御話仕て見ませう。

## 慈悲の目に醜きものなし附コネリヤの話

第一、慈悲と云ふ眼を有て居る人には、憎いものはありません。皆さん方は、自分の子供には、其の眼を明けて向ひますから。子供の氣質に、よし惡しありても、皆夫れが一樣に立派なものになつて見へるてせう。夫れ故子供の方ても、其愛心を認めて居るから、自分の親が一番立派に見へます。昔羅馬にコネリヤと云ふ、極めて貧乏な婦人がありました。けれども此婦人は、二人の子供を有つて居る、そして非常に夫れを愛して居る。一日立派な金持の奥さんが、此婦人の處へ遊に來られ、共に庭を散歩して居つた、其時コネリヤの若い方の子が、兄に向ひ。家のお母さんと一所に散歩して居る、あの人は、立派な人ではないか、丸て女王樣の如く見ゆる」と云ひますと、兄は「左樣ぢや、けれども家のお母さんには及ばない」と云ふた相てあります。其實此母親の、麁末な服を着て、お客に來た奥さんとは、容貌に於て風采に於て、お月樣と鼈との相違があつたけれど、子供等の眼からは一番立派に見へたと云ふ事てある。夫れから此奥さんが、庭のテーブルの上て、小さな箱を擴げ金剛石の指輪、眞珠の鎖、黃金の頸飾、七寶の珠などを數々並べて見せた上て、自分の仕合せな事を誇り。又コネリヤの貧乏なる事に同情を寄せ、「お前さんと私は、

舊同じ身分のものでありましたが、私は幸にして、今の身分になつたけれど、あなたは不仕合にして、夫を失はれ、引續いての不幸御察し申します」と慰めた處、コネリヤは「イーエ決して私は不幸ではありませぬ。私が此二人の子供は、無上の寶て、此れある限りは、決して不幸に思ひませぬ」と、申した相で御座います。子供の目には女王よりも美く見え、母の眼には、金銀寶玉よりも、子供の貴く見へるのは、雙方の間に、慈悲と愛情とがあるからです。故に皆さん方も、此慈悲の眼を以て、世の中を見たら、決して見憎いものはなく、又世の中の人も、皆さんを立派に見るで御座いませう。

慈悲の目に金なし、物に忠實なり

第二に慈悲の眼を具へた人は、人の爲めを思ふ親切心があるから、唯金の爲にのみ働きはせぬ。金や名譽の爲めに働く仕事は、大義である。退屈はある、飽が來る甘く往かぬと中途で止め度くもなる、永續せぬ。日本では勞働賃金が安い、一日平均三十錢位であると、或る統計學者が申して居ります。米國は之れに比べると、勞働賃金が極めて高い。家屋の掃除人で月七八十圓、農業の日雇で砂糖大根の仕事が四圓で、苺栽培の仕事が三圓である。若しピースウオークと稱して、競爭で遣る段になると、葡萄摘りが十圓から十五六圓で、林檎の箱詰などが六七圓にもなるであらふ。日本とは丸で比較にならぬ。夫れであるから日本人が米國に渡つた最初は、天國へ來た樣な心持で働くけれど、夫れが多く金の爲めであるから、二三年も經つと、其仕事に飽が來る。一日十時間が、大層強い事になる。夫れで「働かずにもつと大金を取る法がない」かと、今度は投機的の企をする。一層酷いのは賭博をする樣になる。三年已上も居ると、却つて借金の出來る樣になるのは、皆此金ばかりを目的にする、親切心の缺けた人に多いのであります。金が目的でなく、他の爲を思ふて仕事する人は、中途で退屈と云ふことが滅多にありませぬ。仕事に味が入りて來ますから、其仕事を愛する樣になつて來るものであります。あの、フランクリンと

云ふ人が、嘗て波斯に公使たりしとき、波斯の首府、テーランに公使館を置いてありしが、一日公使館の窓硝子に金の文字を書かせる爲め、若干の金にて請負はせました。然るに其請負人は、丁寧に仕事をする、中に利かり相もない程、念を入れて書いて居りました。フ氏は「お前夫れでは損が往かぬか」と尋ねられた時、其職人の答が「私は仕事の爲めに働くので、金の爲めには働きません」と云ふのでありました、富氏は之を聞いて「噫ペルシャにも個樣な豪い人があるか」と、感心仕たと云ふ事である。其處で皆さん方も、多少慈悲の眼を以て、世の爲め、人の爲めを思ひ仕事をなされたら、必ず仕舞には金の爲めでなく、仕事の爲めに、面白く働く樣になれませう。そうすれば世間の人も皆さんを用ひ、皆さんは面白く働けます。

慈悲眼は觀察に長ず

第三に慈悲の眼あるものは、自分ばかりの爲めでなく、人の爲を思ふのであるから、物を見るにも念の入れ方が違つて來ます。人に話して聞かせ樣と思はぬ人の演



說や法話を聽いて、格別感心仕ない事でも、自分が一つ遣つて見る積りになると、今一つ面白味が添ふて來るものです。自分丈が學ぶ書物なら、少し位不明な處があつても、其儘に通り過ごす事もあるが。人に敎へる覺悟で、其書物を見た時は、念の入れ方が違います。親鸞聖人や、法然聖人が、一切經を御覽なさるゝ御思召と云ふものは、「如何にして末代下根の衆生が佛になるべきか」と云ふ處にあつたのであるから、其見方が唯一「學問を仕て自分の名を擧げやう」と云ふ衆僧とは、異なつて居つたのである。夫れ故同じ一切經を讀むにも讀み方が違ふて來ます。凡人の見付ける事の出來ぬ處へ、眼が屆いたのでありますぞ。佛の法を聽くにも其通りである自分ばかり證を開く積り、人に勝れる積で聞いて居るよりも、自分が又此喜びを如何に人に頒つべきかを考ふるときは、其聽振りに實が入りますぞ、故に佛は此事を「過を求とめず、聽け、議論の爲めに聞かされ、人に勝らんが爲めに聽かされ、聽く時は法を輕んぜされ、聽く時は自から聽んぜされ、聽く時は信心を具せんが爲め

にせよ、聽く時は衆生を調へんが爲めにせよ」と戒められましたので御座います。

慈悲心は、如何にして起すべきか

偖て最後に「其慈悲心は如何にして起すべきか」「慈眼は如何に具すべきか」と云ふ問題になりますが、夫れはどうしても佛を信仰せねば出來ぬ事であらふと思ふのである、尤も世の中にも豪い人がありて、自分の力で慈眼を具ふる事の出來るものも無いでもないが、夫れは極めて稀れなる事で御座います。普通の人は是非宗教の御蔭を蒙り、信佛の因緣に依らねばならぬ事であらふと思ひます。故に、親鸞聖人は御和讃に「小慈小悲もなき身にて、有情利益は思ふまじ、如來の願船いまさずば苦海をいかでかわたるべき」と、仰せられて御座います。吾々人間には、正直な處を云ふと、此慈悲心と云ふものが極めて薄いのである、「夫れは御氣の毒」と云ふても、中々自分の身に感ずる樣な事とは違ふのです。其處で先づ如來の本願力に乘じ如來を信ずるが、善い。さすれば如來大悲の御恩德が追々知られます。さうすれば自然につぶれて居つた慈眼も追々開けます。是れは佛を信じた其日から、すぐに明く人もありませう。けれども若し明かぬからとて、決して僞りではない。御恩を忘れずに相續すると、必ず少し宛明いて來ます。夫れは今此處で御話をするよりも、皆さんが實地に經驗せらるゝが、近道であらふと思ひます。

## 親友

人として親友なきは、兄弟なき獨身者と同じく、誠に心寂しき限と曰はなければならぬ。親友は兄弟に準ずる程のものでよつてあつて、同じ親の爲さぬ義兄弟とも云ふべきである。善あるときこれを喜び、惡あるときは共に之れを憂ふるがすなはち親友である。故に親友あれば樂は二倍になり、悲あれば半減することにある。親友あるものは仕て見ると仕合せなことではありませんか。一人の親友ありても此通りなれば、多くの親友を持てるものゝ幸福は又大したものではありませんか。

親友は滅多に得られぬ。

處が親友と云ふものは重寶であるが、滅多に得られぬ。人は如何なるものも擇ばず、迂濶な交をするものもあれど、夫れは極めて危險なことである。惡い兄弟を持つた者の迷惑が一通りでないことは一般に善く知られて居ることゝ思ふ。親友は準兄弟も同樣なれば、夫れが若しも惡かつた節には、己の難儀は一通でない、善友は我身の得なれども、惡友は敵よりも恐ろしきもので、知らぬ間に繩を我頸に掛け、此身に惡臭を薫じて心迄も腐敗せしむるものである。

## 佛陀の教訓

佛或時難陀と共に迦毘羅波蘇都なる或る魚店に御出になり、魚の上にかけてある茅を見て「あれを取つて來て暫く握つて居れ」と仰せられた。難陀は命の如く之れを取つて握り、暫して之れを放すと佛は「どうぢやな夫れを握つた手はどんな香がするか」と御尋ねになりました。「矢張魚臭う御座います」と申上げられると釋尊は「そふであろふ、汝善く聽け惡智識に交はり、惡友と交際するものは須臾にして惡業に染み、惡名を流すこと又此魚臭き茅を取つて魚臭くなると同じことであるぞよ」と御教訓なされたとのことであります。

或る時又佛は香屋へ御出になり難陀に香袋を取らせ其手が香に薫ぜられ善き香のするを嗅がせ難陀今度はどうぢや」と御尋ねになりました。「今度はけつかうな香が致します」と申し上げられた、すると佛陀は「それ見よ手が握るものに依て樣々に香ふてはないか、汝若し善知識につき善友に交はらば其德に薫じ大名を擧ぐることが出來るぞよ」と御諭しなされたとのことであります。是れは本行經の意を取つて御話いたしたのであります。されば恐るべきは惡友で、持つべきものは善友であります。美音の人が唱ふのを聞いて歸ると、暫時の間は其聲が耳の底に殘りて居る樣に思はれるし、優しき人の振舞を見た時は、獨居ても目の前にあるが如く、善友に接すれば自づと其人の風采言行を氣取る樣になります。詰まり善人に交はれば善人

の香が附いて來るものであります。こゝを和讃に「染香人のその身には香氣あるが如くなり、これをすなはち名づけてぞ香光莊嚴とまふすなり」と仰せられました。

## 信仰の人には少くとも三人の親友あり

信仰を得た人は不幸にして、此世に親友がなくとも、此心には少なくとも三人の立派な親友が出來て下ださいます。「ひとりして喜ばゞ二人と思へ、二人して喜ばゞ三人と思へ、其一人は親鸞なり」とあれば獲信の人には先づ第一に親鸞聖人が吾々の親友となつて下ださいます。又和讃に「他力の信心うるひとを、うやまひおほきによろこべば、すなはちわが親友ぞと、敎主世尊はほめたまふ」とあります。敎主世尊とは申す迄でもなく大聖釋迦牟尼佛のことであります。仕て見ればお釋迦樣が吾々の親友になつて下さるとの事であります。それから又「子の母をおもふがごとくにて衆生佛を憶すれば、現前當來とほからず、如來を拜見うたがはず」とありますから、信心を得て慶喜憶念の人は阿彌陀如來が之れを見そなはし、早速光明の中に攝め取り、其人の親とも親友ともなつて下され晝夜離れたまはぬとのことで御座います。世中では賤しい者が貴い人を親友に仕たいと思ふても、貴い人は「お前の樣な賤しき者は嫌ぢや」と向ふから逃げるであらふに。今は辱なくも十方法界の本師法王彌陀如來、三國一の大聖釋迦牟尼佛、和朝眞宗の開祖親鸞聖人の三方が向ふから親友ぢやと、信心の人に御名乘り下ださるとは實に身に余る名譽なことゝ曰はねばなりませぬ。こう云ふ人は、交はる親友が佛聖人なるを以て、如來の明光に觸れ、香に染みたる人が香のかほりする如く、光明に觸れて光明の御慈悲が薫ずるゆへ、觸光柔軟と心が優しくなり、慈悲の香がするとのことであります。之れ香光莊嚴の人と申すなりと親鸞聖人の仰せであります。今日ハイカラでなくとも人中へ出る時、若しも身に異臭ありては失禮にもならふと嗜深き人は香水を身にあびて出るが、これは香水莊嚴と云ふものであらふ。身の臭きは香水や麝香で莊嚴も出來やうが、心の臭きは何んとせんか、香水や麝香では役に立たゝぬ香光莊嚴でなければ

諸佛が承知し玉はぬ。否心ある人も承知せぬてありましやう。其處で其香光莊嚴とは釋迦彌陀二尊と聖人樣とを親友に持つべきものである。此御方を親友にするには信心ノ人でなくては叶はぬのである。

## 友の種類

世の中で親友と稱するものて、油斷のならぬ親友がある。是れ友を擇ぶことを知らぬからであらふと思ひます。依て友には如何種類があるか、一應取り調べて置かねばならぬ。先づ第一に「口頭の友」と云ふがある。汽車の中で素性も知れないものと話し合ふ樣に、唯口先きばかりて交際する友を云ふ、或は俗に云ふ「四邊三軒兩隣」の如く深く心が合ふて交はるのでもないが、互に顏をつき合せて見れば、默つても居られず、「お早う」とか、「遊に御出で」とか何んとか、かんとか云ふところから交はるのも矢張口頭の友と云ふものであらふ。是種の友は誰にもあるべきもので、可もなく不可もなして實は親友とて初めからある譯のものでない。皆この口頭の友から進むのであらふから、自分としては唯實意を盡す外はない。併し親友とは勿論こんなことでない。

第二には花見の御客と同じく、盛んな時には來るが、衰いた時は振り返つて見も仕ない友がある。世にはこんな花見見た樣な友を澤山に持ち、得々として其味方の多きに誇り、後に捨てらるゝことも知らず、たよりに思ふて居る人がある。高貴の人はよく〳〵調べて見るがよいと思ふ。

第三には自分に重みあれば、頭を下げて近づいて來るが、自分の身分が輕くなつたときは頭をあげて輕蔑する友がある。官吏などには此友が多い。之れを名けて秤友と云ふのである。

第四には向つて前の方では大層譽めて、立派なことを云ふが後の方では惡口を云ふもの、私は之れ馬友と云ひたいのである。何となれば馬の樣に前足では抱き込み後足では蹶るものであるからである。

第五には其者が困つた時は親の樣に泣き付いて來、こちらが困つたときは捨てゝ逃げるもの、又金氣あるとき磁石の如く吸ひ付くが、金氣が取れた時ピンと芋蟲の如くそり返へる友がある。これを日和友等と云ひ度いのである。

第六には飲食遊興を主意として交はるもの、是れは以ての外心苦しき友である。我が國には不幸にして此種の友が多い、政治家などに此友が多い樣に見受られます。之れを名けて口腹の友と云ふ。其處て已上擧げたる花見友だち、秤友だち、馬の朋友、日和朋友、口腹の友だちなどは、啻に親友とすべからざるのみならず、是れ卽ち惡友にして近くべからざるものであります。但、佛の道に指を染めた程の者はかゝる者をも敵視せず、我が心に用心して靜かに之れを正す程の覺悟がなくてはなりませぬ。

## 親友として擇ぶには

然らば親友として擇ぶには何を以て標準とすべきか。四分律に「阿難佛に問ふて曰はく如何なるか親友となす」佛答へて宜はく與へ難きを與へ、作し難きを作し、忍び難きを忍び、密事を語り、密事を他に語らず、苦に遇ふても捨てず、貪賤となるも輕んせず、此七を具ふるを親友と云ふ」とあります。仕て見ると親友と云ふものは實に得難きものと曰はなければなりません。此七つの中其一二を有するもの或は世にあることでありましまう、之れを名けて益友と申します。吾々は不幸にして親友を得る能はずば、益友なりとも擇び取つて交はり往かなければなりません。併、これにつけても先づ第一に顧なければならぬ事は、已れの身の上であります。自分は、又果して人の親友たる價値のあるものでありませうか、こゝをよく取調べねばなりません。我れは果して、花見友だちでなきや秤や馬でなきやを顧みなければならぬ。若し幾分にても斯るものなりとせば大きに恥ぢねばなりませぬ。宜しく親友たる二尊の照覽を乞ひ、親鸞聖人に對して誤まり入らねばなりませぬ。如來が我等に對して親友なりと仰せられしは果して口頭丈けなりしか。濁惡の衆生、底下

の凡愚に授くるに極善最上の南無阿彌陀佛を以てし玉ふのである、兆載永劫に積み累ねられた功德の塊が此六字である、夫れを令諸衆生功德成就を吾等に與へ玉ふ、是れ與へ難きを與ふものではありませぬか。之れを與へん爲めの御辛勞が無量永劫であつたと云ふ經には「假令身を諸の苦毒の中に止くとも、我行は精進にして忍で終に悔えず」とあります。是れ忍び難きを忍ぶものではないか。十方衆生程の多くのものを住まはしむべく、廣大無邊際の淨土を建立せられ而かも二百一十億の淨土より選擇攝取し三嚴二十九種の莊嚴微妙美麗の土を成就せられしは是れ成し難きを作せるものではないか、吾等が心は穢惡汚染、人には明けて曰はれぬ、それをさもあらうと我が身か氣付かぬ先から、痒き處へ御慈悲の手が行屆き「假令罪はいかほど深くとも廻心懺悔して我を賴め必ず呑込んで遣るぞとは是れ密事をおまもり下さるのではないか。貧窮卑賤をきらはず」とあれば、貧賤を輕じ給はざる御慈悲である。平生疎遠に暮し佛とも法とも知らざるものが、浮世の賴の綱も切れ、獨り惡業の重荷を負ふて死出の名殘に苦しむ時も、賴みになつて下さるゝが彌陀如來と聞く、是れ苦に遇ても捨てざるものと曰はなければならぬ。こう云ふ確實な親友を持てる信者なれば、染香人の其身には、香氣あるが如くにて、香光莊嚴せるものあれば、其心得を以て世に立ち、人に交はる樣に心掛けて戴きたいものであります。

大正三年三月十五日印刷
大正三年三月十八日發行
（定價九十五錢）

修養清談

不許複製

著作者　井上盡奥
發行者　東京市麻布區飯倉町五丁目　森江佐七
發賣元　東京市麻布區飯倉町五丁目　振替口座東京三七二番　森江本店
印刷者　東京市京橋區築地二丁目　畑中爲之助
發賣所　東京市本郷區春木町二丁目　森江分店

賣捌所
東京堂　鴻盟社　誠進堂　教盟堂　光融館　教報社
貝葉書院　法林館　法藏館　興教書院　法文館　顯道書院
盛文館　菊竹書店　柳原書店　洗心書房　文光堂　萬松堂

大内青巒先生著

第四版

# 人道講話

三六版裝禎頗美
定價金三十五錢
送料金　四　錢

それ人とは何ぞや？人道とは何ぞや？？是實に千古の一大問題たり此至難問題を解決し以て人道の奥理を說かんが爲に本書は明治思想敎會の恩人にして且つ重鎭と仰かるゝ青巒先生に依つて平易明快に詳述せられ千古の一大問題は本書に依つて悉く盡されたり、國家今や益々多事の秋我修養界此名著を有す豈に獨り思想界のみの慶事と云はんや、迷ふ者よ、疲れたる者よ、苟も人生の眞理を究め人道の奥秘を解し生活の眞情を味ひ又以て處世の安樂を希ふ人士は走せて之の一大寶庫を開け、芳泉忽ち千古の疑惑を拂ひ知得することを得。

## 森江本店發兌略書目

電話芝局一二七四番
振替口座東京三七二番

加藤咄堂、大住舜、足立栗園先生編

**■布敎新辭典**　洋金裝圓料三十五錢　送料金五十二錢

時代の進運に伴ひ嶄新の資料を要するは布敎家の實驗なり本書は布敎の新資料を提供し和歌俳句、譬喩因緣、史蹟學說、金言世諺敎理の各方面に亘りて、蒐集しいろは引として一目の下に多くの材料を得らるべき用意周到實に布敎家の材料を得るのみならず敎育家必須書

加藤咄堂先生編

**■布敎大鑑**　洋金裝圓料一錢　送料金五十二錢

本書は古今東西の材料を蒐集し特に現代大家の實地應用せらるゝ資料たる者を網羅して洩すなく應用自在に活用するを得べし、布敎家敎育家坐右の顧問として一日も缺く可からざるの珍書なり速に一本贈ふて良師友たらん事を切に進む

楫東獅々吼道人著

**■譬喩因緣觀音說敎**　美定價送料全八十錢

內容極めて通俗に觀音普門品の利益を事實的に指導し人情適合救世世三身說法を國家的に證明活示して餘溫無し譬喩簡明にして功妙卑近にして通俗因緣典據明確にして聽衆を感動し易く眞理に合法して鬼神を悲泣せしむ著者は原說敎學專攻の師家たり

加藤咄堂先生著

**■佛敎講演集**　菊定價送料全一冊七十五錢

本書は居士の最も優秀なる講演廿編を選び居士自ら註釋を施したる者にして淸新の思想と幽玄の敎理とは平易通俗の筆に依りて傳へられ讀者をして坐ながら居士の雄辯を聽くの感あらしむ

加藤咄堂先生著

**■最新應用說敎學講義**　洋定價送料全四十六錢　裝金一冊十錢

本書は說敎の目的より音聲の使用法及說敎の組織、譬喩因緣の適用法は勿論、青年、婦人、監獄、軍隊等の請傳道に關する模範を示し全編悉く修辭、論理の二宗を根本として東西各家の意見を參酌した珍書たり

加藤咄堂先生著
■心の研究
洋装全一冊　價金十五錢　送料六錢

心とわ何ぞや是れ何人も知らんと欲して知る能わざる一大疑問なり本書は加藤咄堂先生が東西古今の學説を綱羅して先づ心に對する研究の變遷する哲學心理學の發達俗話傳説覽靈の有無幻術催眠術の學理等例を擧げ理を示し現性を説き情緒を示す文章平易一讀を要す

加藤咄堂先生著
■大乘佛教百話
洋装全一冊　價金四十錢　送料六錢

本書は大乘教の大意を何人にも解し易く談話體に綴らさたる者にて佛教の何者たる　説き教主の傳記大小乘の別經律論三藏の事を示し各宗の教義印度支那日本の佛教教理系統を示し外教との比較併て佛教研究の順序を示したれば佛教の大意を知らんとする者の是非一讀必須書

加藤咄堂先生著
■大乘佛教大綱
洋装全一冊　價金五十錢　送料六錢

八萬四千の法門七百の經卷四十幾派と分れて居る佛教も其根本に於て一貫の道理ある者であります本書は此一貫の道理を提げて百個の問答を設けて説き明したる者は本書なり通佛教の原理は此中に於て求むべく大乘佛教の極意は是れに依て知る事を得る寶典たり

足立栗園先生編
■高僧碩德教訓俚謠集
寸珍全一冊　價金四十錢　送料五錢

本書は古來の高僧碩德が世に教化の爲め親しく綴られたる童謠俚歌を綱羅し農夫が鋤を手にし工女が梭の調に和しながらも人情の美を養ひ眞に道に進み得る經典ならし むこの誠に是れ人を救ふ者の爲め最上の資料又た自ら修身齊家の良師友ならずや

大內青巒先生著
■人道講話
三五刷全一冊　價金五十錢　送料四錢

人とは何ぞや是れ實に千古の一大問題なり此至難の問題を解決せんが爲に出でたるは即ち本書明治教界の恩人にして且つ斯界の元老たる大內青巒先生により平易明快に闡明せらる千古の疑問は頓に氷解して伏仰天地に恥ざる底の人たるを得ん

忽滑谷快天先生著
■浮世莊子講話　附田舍莊子
洋装全一冊　價金七十錢　送料六錢

古來奇想妙文の泰斗と稱せらるゝ莊子より出でゝしかも莊子より奇に莊子より妙なるは浮世莊子なり、警語の奇警、文辭の奇拔全く奇想天外より降るの思あり諦に參し處生秘訣を知らんとする者も布教傳道に志ある者は必ず浮世莊子の奇想妙文を讀ざる可らず



アヂントン、ブルース氏原著
忽滑谷快天、門脇伯水先生譯
■心靈の謎
洋定價送料
全一冊　錢八十

本書は心靈界の泰斗たる著者が最も確實にして信憑する にたる實驗例を引照し交靈術、催眠、傳心、變態心理、精神療法等を論評し、更に心靈界の現象を詳述し其の眞秘を開き、天眼通天耳通他心通宿命通等を說進で死後靈魂存續の狀態に及び各方面に涉れる事實談は讀者をして驚心目せしむるに足る不思議の現象を綱羅したる一大名著也

井上盡奧先生著
■模範講話修養清談
洋装全一冊　價金九十錢　送料八錢

本書は廣汎なる佛教の眞理を是迄爲し來りし專門家の如く複雜にして面倒な講話をもせず適當な譬喩と古今東西に涉りて趣味ある例證とを持ち來り一讀すれば何人にも有難く判かる樣に說明したる者布教傳道に從事せらるゝ人又家庭の友として通俗講話の資料たり

故文學士藤井宣正著
■愛棋全集
洋定價送料
全一冊　價金二十錢　送料二錢

本書は著者が歐州留學の日に於て印度探檢の時に於て研究し、創作し、編纂せられたる、者無慮幾十種而も其出版せられたる者尠少なるは學界の大不幸ならずや全集一卷是を五鑑に分ち支那佛教史、第二英國教會制度概觀等にして佛教家の欠くべからざる珍品たり

境野黃洋先生著
■印度佛教史綱
洋定價送料
全一冊　價金五十錢　送料八錢

本會は印度佛教の教理と事實とを併せて能く簡明に其の要を盡くし得たる本書の如きは未だ他に見ざる處佛教を學ばんとする士は必ず必讀せよ章を分つ十五節を分つ二百十七、大乘佛教の教理發達の由來を述るに至りては著者自ら獨得の說あり

境野黃洋先生著
■支那佛教史綱
洋金送料
全一冊　價金一圓五十錢　送料八錢

本書は諸宗發達の路程を叙し先づ佛教の傳來に筆を起し支那と印度佛教との關係を明かにし六朝に於ける佛教の狀態唐代、宋代に於ける各宗の勃興より再興に及び剌麻教の盛行を述べて明清佛教裏面の大勢を叙したり須らく佛教々義の要旨に通ぜんと欲する者は先づ本書を讀め

伊藤俊道師著
■釋迦實傳記
美定價送料
全二冊　價金七十錢　送料八錢

世に釋尊傳記種々あるも本書は著者廿餘の年間一切藏經を眞寫して釋迦の悲智圓滿なる事實の德想をものしたる者にして御降誕より成道涅槃に至る迄詳細に述べられたる者文章平易なり

大崎龍淵師著

## ■白隱禪師傳

洋定送 裝價四十錢 全一冊 金五錢八

駿河には過ぎたるものが二ツあり、一に富士山二に原の白隱と、師は實に日本の達磨大師なり其の德其の學其の膽、近代禪林普く高風を仰ぐ禪風に浴するものと否とを問わず先づ本師の傳を熟讀玩味すべきなり

小野藤丸先生著

## ■弘法大師傳

洋定送 裝價四十錢 全一冊 金五錢八

日本文明の祖師と謳ほる〻大師、大師と云ふは即ち弘法の獨占を意味す、此の大人物に對して未だ組織的に乏し著者之を慨し善く史料を交渉して本書一卷を大成す

布教奬學研究會編

## ■佛教史談 西行法師

洋定送 裝價全一冊 金十三錢四

西行法師の出家から大往生迄を十二席で法師の生涯を話し一席毎に段敎を仕組んだ至極面白い且つ頗る卷文句調であるから言葉が自然華やかである故に一たび繙く者には何つも間に卷を終て仕舞ふと共に傳記が自然に暗誦せられる

本多無外先生譯

## ■釋尊物語

洋定送 裝價全一冊 金五十錢六

本書は少年少女の讀物として叙述せられたるものにして實に面白く釋尊に一代記の事蹟が能く了解出來得る樣に述べられたる名著にして文章は頗る平易なれば少年少女の讀本として實に適當の良書たり

望月信享先生著

## ■法然上人正傳

洋定送 上製並製 裝價六十五錢 金五十錢

上人の傳記は古來十數種あると雖も記載の事實中疑似に亘るもの少からず本書は著者十數年內外の諸典に就き研究せられたる最も確實にして信憑するに足るべき史料に基き著述せられたるものなれば實に傳記中最も正確たるを證して餘りあり

齋藤唯信先生著

## ■佛教學概論

洋定送 裝價一冊 全十錢 圓二十錢

現代佛教界の泰斗齋藤先生が多年一日の如く浩々なる一大佛教を研究して得られたる結果で固より百年の大著たり本書は甚深に微妙なる佛教々理を根本的に解決せられたる書で佛教を研究すべき諸君の一大羅針盤たれば篤學者は是非一讀を要す



加藤咄堂先生著

## ■維摩經講話

洋特送 裝價全二冊 金三十錢 圓

本書は古來佛教文學の一大精粹と稱されたる者にして今咄堂居士多年研究を傾けて通俗平易に是れを講解現代の思想を背景とし三千年前の維摩を活躍せしむ付するに聖德太子義疏全文及古來の註疏を網羅して本書の完璧を期したり

松本文學博士著

## ■達磨

洋定送 裝價全一冊 金圓八錢 一廿

著者多年苦心の結果に成る一大快著にして佛教史上の一大快物千古の一大疑問たる達磨大師の眞精を最も大膽に最も露骨に解剖せられたる名著にして達磨大師の抹殺か將た存在か殺活の權は本書にあり乞ふ大師の正傳たる本書を讀みて其眞想を知り給へ

寶山梵成編

## ■少室六門

洋定送 裝價四十錢 全二冊 五錢八

少室は達磨大師九年面壁の道場にして本書は大師の皮肉骨髓禪門の一大寶典なり苟も不立文字直指人心見性成佛の大旨を窺はんとする者は本書に依りて親しく禪味を了解せられよ

神谷篤倫著

## ■精神練磨 禪の要術

洋定送 裝價全一冊 四十錢 五

本書は坐法より調身、調息、調心の要術に至るまで懇切丁寧に生理上或は學理上より開示せられたる者にて坐禪の方法を知らむとするの士は先づ第一に讀了し奥を究むべき良書たり

達磨耶庵著

## ■通俗新話 參禪の活路

洋定送 裝價全一冊 金五十錢 六

本書は禪の奥義を提て尤も平易に最も簡明に社會、國家家庭に關する諸般の活路を說き明したる禪的偉人は員每に放光勃地躍如として顯はれ煩悶せる者には禪的慰安を與へ死生岸頭に迷ふものには驀直に殺活の自在か與ふと

横尾賢宗老師著

## ■普勸 坐禪儀 通俗十回講話

洋定送 裝價全一冊 金十錢 四

禪の趣味を知り禪の根本淵源を通俗平易に一般人士に滿足せ與ふるは本書の特色にして老師が極めて平易に丁寧の親印に通俗的に而も簡にして明瞭に講話せられたれば禪の趣味を知ると共に大悟徹底の人となれ

神谷篤倫師編
■新撰 **引導法語軌範**
洋定送 全一冊 裝價九十錢 料金五錢八

本書は開卷に引導起源の要を掲げ本書を季節門、應用門附門、に大別し更に出家在家の二部として十二ヶ月に分類し應用自在ならしめ附門には僧俗の點茶湯等の文を加へ總して數百種皆原文に和譯を對照し最後に法名索引を附して引導文に對する法名の索引を引照自在ならしむ實に模範的引導法語全集たり

岸和田一雄師編
■訂正 增補 **洞上佛事編**
和定送 裝價 料金一圓 共二冊

本書の上卷は洞宗佛事法式に關する三十餘有の大禪智識の諸法語中其粹を摘錄したるもの晋山、開堂、結制、退院等より引導、施餓鬼會、般若、入佛、歎佛等は勿論祭文、塔婆銘文、寫像賛辭に至る迄洩さず下卷には其作例軌範を示して應用自在ならしめ

竺山默禪師著
■曹洞教會 **修證義引導法語**
洋定送 裝價 料金二十錢 寸二錢

曹洞宗祖道元禪師の暖皮骨は正法眼藏にして其の金玉の精粹を拔抄して在家化導の寶典となりたるは修證義なり此修證義の其精神を基として引導法語を撰びしは實に本書にして洞門の大導師は日常懷中して應用せよ

佐々木月樵先生著
■**實驗の宗教**
洋定送 裝價 料金八 全一冊 十錢

人格の惑化は大靈の活ける攝取也著者自己心中の煩悶を醫し大安住の地を得んとして焦慮ずる多年、時に各敎祖高僧碩德各々其異なる人格の光れる宇宙の靈氣に接し自己の信念を得宗教の確實を見る、至れり、萬なる人格に接して信念を得修養に資せんと欲する者は少非一讀せざる可ず

加藤咄堂先生編輯
■眞宗 **名家講演集**
洋定送 裝價 料金二十錢 全一冊 五錢四

本書は島地默雷、齋藤唯信、近角常觀、南條博士、前田博士、上杉文秀、佐々木月樵、島地大等、菅瀨芳英、柘植秋畝諸大家の講演せられたる者眞宗の教義安心は本書一卷にありされば眞宗信者は無論他宗の僧俗を問わず佛教研究者は遠かに座右に供へ此の教義を味わへ

西元龍拳先生著
■增補 訂正 **眞宗百話**
洋定送 裝價 料金四錢 全一冊 六錢

平易に簡明にして組織的に眞宗の教安を述べたる者を見ず爲めに眞宗初門の入道者は亂麻の緒を滿ざるが如く茫然自失遂ひ彌陀の本願海に入る事能わず是等求道者に對して其不備を補わん爲百問の話題に依りて本宗の教義を適確に說明せられるなり



大內靑巒先生演譯、安藤正純師和譯
■**淨土三部妙典譯解**
和定送 裝價 料金五十錢 全一冊 八錢

古來註譯せるもの皆潔簡其要を得ず兩先生も深く是れを慨し他力淨土門正依の無量壽經觀無量壽經阿彌陀經なる三經を國譯し周到なる用意とを以て解釋せられたれば三經の眞意義は直ちに氷解せらる

大內靑巒先生著
■通俗 **佛遺教經講義**
洋定送 裝價 料金二十錢 全一冊 二錢

拘戸那城邊双樹の間に御入滅せられた人天の大光明釋尊が御臨終の敎誡で但に僧侶のみならず在家の誠心に拜讀すべき御經文である今此の御經文講述は大內氏が出家在家共に解し易からしめたる者であります

大內靑巒先生著
■通俗 **般若心經講義**
洋定送 裝價 料金十錢 全一冊 二錢

佛が金口の妙法般若六百卷を僅かに二百六十二字に疊みたる者は心經でありますが各宗の日夜拜讀いたす所大內氏等の貴重なる經文を講ずる事詳しく明瞭にして御經の歷史を述べられてあります

來馬琢道師著
■通俗 **觀音經講義**
洋定送 裝價 料金十錢 全一冊 二錢

此の書は原文の御經を訓讀に書き、其本文に講釋を加へたるもの文體は平易觀世音菩薩の御德は讀むものをして自ら家內安全子孫長久福德圓滿利を得るを知る

文學士吉田修夫先生著
■**觀音の信仰**
洋定送 裝價 料金十錢 全一冊 五錢二錢

觀音經の成立より觀音の佛格觀音の妙智力等苟も觀音を信仰する信者の使命心得等は者獨得の見地より懇切に熱烈に說明し觀音の新生命を發揮して餘蘊なし國利民福の實を擧げんと欲する志士は必讀を要す

荒井淚光先生編
■明治說敎 **因緣大鑑**
洋定送 裝價 料金一圓廿錢 全一冊 八錢

尤も熱望せられつゝある明治現代の新事實因緣談はあらゆる方面に亘りて多種多樣然も趣味深遠に蒐輯網羅せられたるは本書なり諸士は本書に依りて實際問題に於ける三世因果の理を究め說敎に演說に布敎傳道に顧問たる本書を佛へよ

中島觀琇老師著

## ■圓光大師御傳說教

洋裝定價金四十八錢　送料金一錢

本書は多年の實驗に依りて著述せられたる者にして大師御一代の芳躅に採り淨土宗の安心起行を詳說して他力易行の法門を細叙す行文流暢通俗平易に述べられたれば應用自在直に是を布演するを得べし

山田意齋叟述

## ■西國三十三所觀音御詠歌略註

和洋定價金五十錢　送料金一錢四錢

本書は觀世音經の敎義に基いて最も解し易き樣に西國卅三所の御詠歌を註釋して觀世音菩薩の利益廣大なる事を詳說してあります加ふるに最初に觀世音を大字に平假名を添へ且つ順拜道程を委しく記入してあります

隱元大禪師著

## ■觀世音靈感吉凶卜占考

和裝定價金廿錢　送料金一錢四錢

本書は隱元禪師觀音の靈感に依りて著し給ふ卜占にして目のあたり吉凶を占ひ緣組旅行公事等の種々の善惡を知る事の妙法を得るの便書なり其占ひ方は銅錢五つを以て更らに工夫も入らず童幼と雖も容易に占ふ事が出來ます

東京眼科病院長井上豐太郎先生著

## ■強眼法

珍價金廿錢　寸定送料金二錢

眼病を恐るゝ人眼病に罹れる人は勿論未だ眼病を知らざる人も此の簡易新式の治療法を讀め眼を憂ふ事無し、內容は眼の力、美しき眼、强き眼、鈍き眼、弱き易、不具の眼、病い眼、眼の按摩、目の運、眼の沐浴、特別運動、根本的療法等

東京坂田病院長先生著

## ■健腦法

珍價金廿錢　寸定送料金二錢

此の健腦法に依りて救われたる人己に幾千人學生諸君が之に依て益する所の多大なるは素より言を俟たず乞ふ此の簡明にして適切なる健腦强腦の新法を讀め先生の健腦法は學理と實驗と依り推論したる者なれば實行し易く而も其効確實なるは多言を要せず

横山文彌先生著譯述

## ■肺病自然療法

珍價金廿錢　寸定送料金二錢

肺病とは、何ぞ肺病は不治なるか、肺病は如何にして治す可きか、空氣療法等の數節に分ちて懇切に其療法を敎ゆ肺病に罹れるも恐るゝもの現に醫師と藥種に迷わざるゝ人は試に本書の敎ゆる處を開き給ふ可し極めて通俗平易に詳述せらる

32 F
213

終